

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和八年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十五卷 第五号（通卷二九三号）

万象

B A N S Y O

八月号

2026. 8



八月の句

亡き犬の亡きを喜ぶ溽暑かな

飛 高 隆 夫

私が浦和句会に参加して何年か経った頃に飛高先生が出された句です。溽暑という季語を知ったのはこの時でした。

溽暑に先生は亡き愛犬を思い出し、生きていないことに安堵なさったのでしょうか。先生の優しさに句会の皆が心打たれたのを覚えています。

同時期に愛犬を偲ぶ句を多く詠んでおられます。

〈黴生えぬ犬の残せしビスケット〉〈亡き犬の迎へ火として手火花す〉〈亡き犬に話落ちつく夜長かな〉

お寂しい気持ちですが句会全体に広がっていました。

（桑原優美子）

令和八年

八月号

万象

BANSYO

誰にでも長編小説が書くことができる
あなたの人生が長編小説なのだから。

高橋和巳（作家・思想家）

万 象

令和8年8月号

主宰作品 夏の詩 江見悦子 4

万象の窓⑤③ 元気になる話 江見悦子 5

名誉顧問作品 黒 靴 小林愛子 6

風音集

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

7

風音散歩④⑤（八月号） 小林愛子 10

同人作品

江見悦子選 11

同人作品の佳句 江見悦子選 31

同人会だより

幹事会報告 内田郁代 32

6月の「万象」オンライン同人句会高点句 33

珈琲ぶれいく⑦⑤ 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞（六月号） 榎本文代 34

同人特別作品

鴨の子 紅露恵子 36

金婚旅行 中村優 37

特別作品評（六月号）・・・・・・・・・・・・・ 荻野加壽子 38

私のこの一句・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 倉谷ます美・宮城 勉・藤本 節子 39

続・風のしをり③② 沢木欣一の指標と信念（二） 中山純子・・・・・・・・・・・・・ 編集部 40

万葉の抒情③⑥ 『万葉集』にたずねる抒情の源流③⑥・・・・・・・・・・・・・ 橋本 清 41

万象ノオト「川」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 松井 宣夫・松永 博子・長谷川洋子
高尾 早弓・加藤 浩子・宮崎 正義 42

万象作品 江見悦子選・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

北から南から 瓜割の滝・鯖街道を吟行して（福井）・・・・・・・・・・・・・ 鶴田 勝子 54

万象作品の佳句・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 江見 悦子 56

新中央句会報（5月例会）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 58

薄荷飴日月譚 絵日記に収まりきらぬ夏祭・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 中村 千久 60

ルビーの小函（八月号）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 編集部・校正担当 61

東西南北・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

夏の詩

江見悦子

(主宰)

籠つつく海鵜の嘴の小さき疵
籠の鵜の眠るしじまや夕近き
篝火や水面に青む鰯の影
網たぐる鵜匠に火の粉舞ひ上がる
嘴痕の小鰯木箱に並べられ
裏門をくぐれば定家葛の香
薔薇の門朝練の子に開け放つ

元気になる話

江 見 悦 子

嬉しいニュースをお知らせします。全国俳誌協会主催の「第三十二回全国俳句コンクール」において、「万象」が結社賞の中の敢闘賞を受賞しました。結社賞としては最優秀賞1誌、敢闘賞3誌、奨励賞4誌が受賞しています。立派な作品集と共に副賞（賞金）が届けられ、元気を頂きました。昨年12月31日締切の投句募集に「万象」から応募された方々が好成績を収めてくれた結果です。「全国俳誌協会」は、「流派・傾向を越えた懇話会的な俳句サロン」を目指す団体として、昭和39年に設立されました。理念について秋尾敏会長はこう述べています。

各俳誌の主張を尊重し合い、俳句の未来をゆるやかに語り合う団体として活動を継続する。昨年、出版社の会で秋尾会長と席が隣り合わせたことがきっかけで「万象」も加盟しました。

現在加盟誌は67誌、今回の「俳句コンクール」の投句数は1318句、選者は各結社の主宰57名で行われました。「万象」からは30名の方が計112句を投句され、全投句数の8・5%に当たります。結社賞は各結社の入選句・特選句を合計したものです。「万象」の力が「敢闘賞」につながりました。以下、ご紹介します。（紙面の都合で佳作の方はお名前だけを記します）

優秀賞

ボス猿の一声枯野動き出す 大村峰子
石を積むだけの仏や草の絮 杉澤 修

秀逸賞

雪掘つて土ほつて採る葱甘し 河野尚子（特選にも・加古宗也選）
聞き流すことも覚えて室の花 杉澤 修（新井大介選）

選者特選

バス停にシャベル吊して冬用意 高野松風（衣川次郎選）
書割のやうなビル群冬夕焼 荻野加壽子（津久井紀代選）

佳作

成瀬真紀子、下嶽孝一、神田美穂子、荻野加壽子、渡辺志ま

今年度は、江見が選者を務める外部の大会が3つあります。「沖縄美ら海俳句全国大会」「第43回信州さらしな・おばすて観月祭全国俳句大会」「第三十三回全国俳句コンクール」、奮って参加し、「万象」の力を示して下さい。

黒 靴

小林 愛子

(名譽顧問)

門アーチ締め上げ定家葛かな
大南風ひゆつと訃報舞ひ込めり
逝き給ふ樹に風起こす黒揚羽
アカンサス前に喪服の女立つ
竹踏みにてあづけて梅雨晴間
小玉西瓜影したかへて板の間に
梅雨ながし使はず捨てず黒靴

沖繩忌

中村千久

(編集人)

夕焼けて

柳澤宗正

(顧問)

坂多き早稲田の杜や走り梅雨
グラントハイツ 回想
青芝に真白き家と星条旗

沖繩忌平和の碑なぞる指
まだ嘘をつけぬ幼子さくらんぼ
羞ひつ紅少しさす浴衣の子
夕顔の闇を散らせる月明り

朝の旅

福島せいぎ

(顧問)

猫眠る

中條睦子

(同人会会長)

山門の高さに泳ぐ鯉のぼり
飛魚の追ひかけてくる朝の旅
漣痕の襷かけのぼる卯波かな
おたまじやくしお玉杓子で掬ひけり
あぢさゐの藍を深むる雨上がり
豚まんを食うて留守番こどもの日

主なき簾椅子いまは猫眠る
二人居て一人にばかり蚊の寄り来
菩提樹の花瓔珞に浄土句碑
更衣歩幅大きく橋渡り
採光を静かに散らす金魚の尾
庭の謂れ聞くや土縁に端居して

夏の星

松原智津子

(北海道)

背伸びしてガラス戸磨く薄暑かな
青芝に大の字をのこの昼休み
豊平川ゆり橋渡る夕涼し
夏の星数ふる通夜の帰り道
パセリ刻む小さな誤解忘るため

筑波山の風

亀田やす子

(栃木)

藍染の服を選びて涼しかり
薫風や藁筆乾く陶工房
四十雀巢に入るときの声低し
目の前に泰山木の花見たり
やはらかき筑波山の風や芥子畑

太宰忌

沢辺たけし

(千葉)

ランドセル背中に馴染み花は葉に
母を追ふ軽鳧の子草につんのめり
雲厚き腐草螢となる夕べ
太宰忌の袖よりのぞく貝釦
さつぱりとしたる夏野に山羊の声

白光

吉中愛子

(東京)

枝つかみ食ぶる子見る子ゆすら梅
白光靖國神社を放てり泰山木一花
尺八の低音青野広々と
房州枇杷こちら元氣と送り来し
連なりて巢に子燕の白き胸

梅雨青し

榎本文代

(神奈川)

銀の匙

井村和子

(石川)

砂山に遠き波音小判草
母の忌の茅花流しに吹かれをり
ゆるゆると遮断機あがり夏燕
表より葉裏に廻りてんと虫
括りたる文学全集梅雨青し

高空に麦星一つ瞬けり
そら豆の冷製スーパ銀の匙
風のこと聞きつ下闇そぞろ行く
どやどやとラガー少年ラムネ飲む
百人の起居にさざめく登山宿

更衣

神田美穂子

(静岡)

うらおそい

前田貴美子

(沖縄)

秘仏見て五月の光まぶしめり
姿見に正す背筋や更衣
砂浴びの象へ夏蝶まつはり来
麦秋や揺れを大きく一輛車
貨車の列植田に影を走らせて

水音の涼しく満つるうらおそい
うらおそいおもろのふしや福木花
雨に添ふ風のひとゆれ曼陀羅華
雨端に吊るすサバニや小満南風
ようどれの薄暑の風を振り返る

※うらおそい……油添市語源の古語

※雨端……軒下

※ようどれ……英祖王・尚寧王の墓

風音散歩 ④⑤ (八月号)

小林愛子

更衣 歩幅大きく橋渡り 中條睦子

「更衣」は陰暦4月1日をもつて衣服を夏ものに改めることとて、もとは宮中行事。貴族社会の約束事が民間に広まった。細かい決め事は歳時記に記載。俳諧では単に「更衣」と言ったら4月1日のことで11月1日を「後の更衣」という。

掲句は「歩幅大きく」とあり、衣を替えて身も心も軽やかになり新鮮な気持ちで橋を渡つたのである。厳密な日取りの曖昧になった今日でも、更衣の爽やかさが好まれている。

母を追ふ軽梟の子草につんのめり 沢辺たけし

「軽梟」は4〜7月に産卵し、雛は26日ぐらいで孵ると歳時記にある。雛が親鳥の背に乗ったり、歩く姿は愛らしい。軽梟は餌を求め、天敵から逃れるために引越しをする。必死に走る親子の姿に車は止まり、人々は誘導へ。「草につんのめり」は遅れて生まれた雛にとつて過酷な道中ということ。それにしても親はなぜ子の数が分るのであろう。

砂山に遠き波音小判草 榎本文代

「砂山」とは風のために吹き寄せられた砂の作る小丘、砂丘である。句は新潟砂丘であらう、北原白秋詩、中山晋平曲

「砂山」。「海は荒海 向こうは佐渡よ」に始まる曲で有名。おだやかな日であった「遠き波音」に体をゆだね、作者は深い感慨に目を細めている。足元の小判草が風に乾いた音を立てた、熟すと黄褐色に変わり俵表とも呼ばれている。

そら豆の冷静スーブ銀の匙 井村和子

そら豆と言えば〈そら豆はまことに青き味したり 綾子〉の句が反射的に浮かぶ。掲句は更にそら豆を「冷製スーブ」に仕立てた。綾子先生がお元氣ならば美味しいとにっこりなさつたであらう。冷たくして供する料理、冷製スーブの美しい海に銀の匙を入れる喜びはまさに生きる喜びでもある。

貨車の列植田に影を走らせて 神田美穂子

田植が終わつたばかりの田は、たつぷり張られた水に幼苗が息づく。時折走る列車は「掘り鉄」も待ち伏せるどころ。歳時記に「最近では生育の初期に除草剤を散布することが多いので、いっそう田水がたつぷりと張られ」とある。農薬問題を孕みつつ「植田に影を走らせて」に臨場感を味わつた。

夏の星数ふる通夜の帰り道 松原智津子

通夜が終わつて夜道を歩いている。来し方の思い出が脳裏に去来して心が落ち着かない、ふと空を見上げた。

「夏の星数ふる」とあるのは、南の空低く横たわる蠍座であらうか、中の一等星アンタレスが赤く輝く。射手座、夏の天の川も見え、宇宙との交信に心をときめかす。

同人作品

江見悦子選



札幌岡本敬子

水芭蕉にとどまりてゐる森の冷え
しろじろと苞の鎮もる水芭蕉
初蝶の低し石狩川渡しあと
もういいかい耳朶に残れるたんぽぽ野
花束の良き色卒寿の薔薇のいろ

札幌林陽子

地に触るるしだれ桜の花重し
髪切りて頂すがしき梅の風
万緑や山膨らめる昨夜の雨
山ほどの露剥き終へて土間暗し
リラの夜の遺影は若き兄笑ふ

札幌落合裕子

残雪の山並はるかなる夜明け
故郷の峰は遠きに薄霞
春光の一矢まぶしき鳥つぶて
古草や鳩うづくまる地の温み
去年のへた残りしままに柿芽吹く

札幌瀨谷和代

瞬く間新芽の育つ日の温し

羊群れ牧場を抜くる青葉風
日陰にも君影草の香り立つ
カヌー漕ぐ湖の風波銀色に
かけつこの赤帽の子等風光る

札幌 大内 和 憲

辛夷咲く明るさに酔ふ休診日
葉隠れに色競ひをりリラの花
花の冷え纏ひ錫杖手に重し
羅漢堂見守りをるか春北斗
瓦斯燈に揺るる蔵窓花の夜

札幌 紅 露 恵 子

校庭の芽柳に触れ風に触れ
初蝶や草食む馬の背渡る
うららかや花冠の少女達
親鸞像へ一礼深し花曇
鳥の群れ見え隠れする花の奥

札幌 大内 マ キ 子

吊橋を踏み出す一步雲の峰
眉太き若き伴僧夏座敷
みちのくの海に向かひて青き踏む

またたきて宇宙ふくらむ星月夜
ラムネ抜く昭和わびしく懐しく

札幌 中 鉢 弘 一

大空を萌黄に染めて木の芽風
中の州に流砂集めて春の川
くくると含める声やはらみ鳥
春刻む形見の時計音かろく
ぼうたんの紅深き染物屋

札幌 北 浦 詩 子

夕さりの春満月のやはらかき
花の雨巖流島の砂に滲む
春雨の波紋崩しつ川下り
千年の銀杏大樹や緑さす
薫風やキャッチボールの捕球音

江別 佐 藤 哲

釣果には触れず籠にはふきのたう
北の海夏炬を焚きて漁待てり
雀の子牛の寝蓐に群れるたり
鍊焼く煙にかすむ利尻富士
はまなすの咲きつぐ浜辺沖ぐもり

江別 太田 佳美

羊の毛刈れる広場に園児の輪
湯の里の溪に百余の鯉のぼり
急逝の兄の無念や青嵐
薫風やクラーク像の指す未来
受付の白磁に一枝八重桜

新潟 高橋 ひろ

蛇と聞くだけで逃げ腰蕨折る
下駄材の積み干されあり桐の花
葎切や西に青々遠弥彦
茄子苗は小さな庭の真ん中へ
古びたる望郷の句碑今年竹

新潟 高野 松風

耕して畝のあはひの立ち話
すり切れし幟はためく春祭
白蝶のふはと風すぢよけにけり
やうやつと吞みくだしたる河鵜かな
独活にみそ肴に独りコップ酒

益子 光岡 れい子

深呼吸肺の奥まで若葉風

柳ゆれ水面のゆれて空ゆるる
つばくらめひと巡りして寺の軒
初夏のひかり跳ね上げ鯉の群れ
東雲の空ひろがつてゆく立夏

芳賀 大村 かし子

花は葉に堤に風の生まれたり
街路樹をがんじがらめに蔦青し
朝ドラを見終へて散歩若葉風
朝戸風弟からの新茶汲む
植田風堰音高き用水路

宇都宮 阿久津 勝利

『椿垣』開く薄暑の景章忌
新樹光魚道に光る稚魚の群
山桜余韻のながき夕の鐘
堰音を濁す卯の花腐しかな
独り居の手入れよき庭つつじ燃ゆ

栃木 上岡 佳子

真竹の子一皮ごとに水の玉
写経会を終へて筍賜りぬ
代掻や後先歩むこふのとり

蜘蛛の罟の全きままに輝ける
暮れ泥む穂麦畑の象牙色
熊鈴のだんだん近く若葉山

佐野 増田 幸子

ちらちらと夏日こぼせる樟大樹
水散つて夏蝶ぱつとたちにけり
立葵の赤きが咲きて煙雨かな
たこ焼の箱しなしなとこどもの日
樹々渡る夕べの風や五月来る

佐野 加藤 季代

雨脚に絹の光や猫柳
雨雫まとふてをりぬ松の芯
瀬を上る鮎渾身の力もて
牡丹や寝釈迦の肩に鳥の糞
木道の行く手に光る青蜥蜴

佐野 阿部 澄

百合の木の花の一つに触るかな
城沼の波にほぐるる蓮浮葉
ひとしきり沼をゆさぶる乗込鮒
夏燕出入り自在の勅使門

遠く近く球児の声や青葉風

佐野 芝宮留美子

古墳山みな若草につつまれし
古墳より浮城はるか桜散る
抱卵期巢塔に鶴の悠々と
鶴舞へり青葦原を大空を
菖蒲田に水引く音や藩主邸

佐野 島田 和枝

花吹雪よちよち歩きの赤い靴
鶯や一番電車の軋む音
駅長の白き手袋雪解風
眩しきは光拡ぐる植田かな
牛小屋に葺かれてゐたり軒菖蒲

佐野 売野 緑

散り尽くす躑躅の紅のしつとりと
父母の墓訪ふ妙高山の芽吹きかな
遠浅間棚田の畦の鼓草
雛連れて小綬鶏過る裾廻かな
北の空へ消ゆる機影や青葉木菟

佐野 店 網 洋 子

沼風や泰山木の花掲げ
雑魚跳ぬる白睡蓮の少し揺れ
夕仕度十葉の花浮きにけり
木の洞に奉納の下駄夏来る
亀泳ぐ影の青さよ薄暑光

足利 大 木 茂

麦秋の夜風に浅き眠りかな
冷し中華仲間にひとり左利き
葛餅の弾力喉を滑りけり
火砕流冷えたる村や松の花
鳥交る塊墜つる国府址

土浦 澤 照 枝

縮れ葉のほどけ浮葉のあさみどり
浦風や水面を踊る蓮浮葉
畦を来る素足の夫の泥乾ぶ
市役所のロビーに惑ふ燕の子
長屋門なんなく抜くる夏燕

加須 茂 木 弘 子

乗れさうな埴輪の馬や春惜しむ

藤房の水漬く水面の青さかな
水攻めに耐へたる城址松の花
茶畑のさ緑の畝膨れゐる
早苗田の一枚づつの落暉かな

さいたま 山 本 右 近

碧海に白き航跡五月来ぬ
釜の底浚ふおかはり筍飯
めまとひをはらひてすぐのホームラン
蠅叩き下手な飲み屋のバイト生
貨車組みしままに夕焼の石油基地

所沢 三 好 か ほ る

春落葉踏む靴音のやはらかし
法然の跡を訪ねて春惜しむ
大鶴の遡りたる疏水かな
学食の厚き机やレモン水
あたたかき日和や憲法記念の日

所沢 南 雲 秀 子

ネモフィラと青空の間園児行く
白鷺の川の真中に立ちゐたり
霞草ささやく如く揺るる丘

池の面の細波となる青葉風
妙義嶺を背に花桐の峠径

千葉 田中道江

「おい」と呼び「おう」と応へり春の畑
春潮や鉄板一枚わたす橋
春の雲空ごと動く雨上がり
夏空や木の間に光る灯明台
杭の鵜の水面に空のまじりあふ

千葉 松浦陵保

御仏へミサ曲捧ぐうらけし
師を偲ぶオルガンの音や花の昼
突堤の道一直線陽炎へり
水温む小川に命新たなり
花吹雪大河に沿うて流れけり

千葉 喜多恭仁子

若葉寒ひとりの午後のミルクティ
薫風や方向音痴は父譲り
水門の信号青へ海鵜跳ぶ
船橋に太宰の植ゑし夾竹桃
海遙か灯明台に新樹燃ゆ

千葉 大月玲子

朝まだき芍薬の香のほけゆく
家々の薔薇見頃なる漁師町
葉桜の重なり合へる昏さかな
昨夜の雨抱く牡丹の重さかな
壊さるる定家葛の匂ふ家

佐倉 大内佐奈枝

鴨引きし田に藁しべの漂へり
茎立や堂八方を開け放ち
噴水の表も裏も光りけり
飛石に息づきてをり初とんぼ
日陰より日向の牡丹見てをりぬ

佐倉 三屋英俊

春惜しむ野にぺんぺんと草鳴らし
ねむりつつ乳すふ稚児や聖五月
襟に袖に入る風親し更衣
暑き日や少年の魚籠からのまま
浮かびくる海月ゆつくり空色に
雨晴れて町翠玉の青葉光

佐倉 横川 良子

空き家とも見えず鈴蘭盛りなり
水門の先は千尋の夏の海
塩田の記憶埋もれし街薄暑
潮の香の届く校庭夏来る
船橋や漁港に遊ぶ夏燕

四街道 奥 太雅

香取神宮神幸祭
うららかや利根川上る鶴首船
笥の進軍したる捨て畑
植田水澄みて映せる蓑毛かな
水門の上の歩道を白日傘
燕来る御菜が浦の荷上げ港

四街道 塗木 翠雲

茶摘女の籠満たしゆく小半時
引き潮の浜に塩噴く浅蜷籠
甘藷植う畝に黒土寄せながら
注ぎたる田水にをどる早苗かな
万緑へ太極拳の四肢伸ばす

船橋 山下 良江

噴水の高く秀上ぐるきほひかな

噴水の秀先に触るる銀の風
仔犬連れ薔薇のトンネルくぐりけり
水音のひびく薔薇園空青し
満開の薔薇の中ゆく幼き子

船橋 久保村 淑子

葉桜をかすめ尾長の声ひびく
競り札の並ぶ漁港の薄暑かな
大神宮青条揚羽ばかり来る
船溜り羽を休むる海鷗かな
田水張るしぶきに遊ぶ雀かな

船橋 片桐 帆一

亡き犬と歩きし道や桐の花
盛りあがる若葉の中の灯明台
片蔭を追ひて小路の道迷ふ
梧桐の大葉夕日の壁こする
牡丹散り真白の花蕊静かなり

船橋 宮本 加津代

影にまで色ありさうな若葉かな
目鼻なき和紙人形や花曇
目に見えぬ道のあるなり蟻の列

銀色の跡を残して蝸牛
柏餅母の齢となりにつけり

船橋 中嶋 久登

香取宮出で御座船の春の旅
桜海老のピンクに埋まる今朝の浜
花菖蒲花嫁舟の櫓軋む
結葉の時折解かれ沢の風
鬼灯の白花一つ葉に隠る

柏 山本とく江

子燕のくぐる浅草二天門
灯明台見上ぐや薫る樟の花
葉桜を映す海老川豊かなり
寺薄暑梵字一つの遊女墓
裸婦像の胸乳に揺るる新樹光

柏 内田 郁代

南吹く漁港の隅の海難碑
糶果てし漁港の黙に水母浮く
鱒走る土俵に散れり樟の花
散松葉東照宮は方一間
黄緑の腹ふくらませ雨蛙

柏 古川 京子

ハンガーにだらりと蘆花の春セーター
鬱金桜幹にあづける試歩の杖
雨上がりの畝にべたりと揚羽蝶
幾度も山藤くぐり湯の宿へ
虹を込め空いつぱいの滝飛沫

流山 穂苅 照子

魚跳ぬる八十八夜の忘れ潮
差し潮の満ちくる早さ夏来る
漁終へし港にくらげ伸び縮み
聖五月木洩れ日遊ぶ宮土俵
たつぷりと光に濡れて柿若葉

市川 奥澤よし江

冠毛に光を浮かべ翁草
亡き母の座して在りしや新茶くむ
厨窓今朝訪ひ来る四十雀
天道虫指先ひよいと離れ飛ぶ
テーラーの残る浜町青葉潮

東京 名和 政代

青柿や祠に散れる貝の殻

弘法のかんばせ幼麦の秋
洋館の鉄錆の窓四葩咲く
たたんたん扇子を叩く講釈師
鉢めがけ水鉄砲の男の子

東京 藤田裕子

雑木山金蘭ひと咲きゐたり
柿若葉谷戸は坂道古墳みち
盛り上がる緑鎮守の樟大樹
白芍薬崩る音なき音ひろげ
汕頭^{スラトウ}のハンカチも入れバッグ閉づ

東京 加賀葉子

天窓へふる桜薬薄紅
イヤリングに海風を聞く清和かな
薫風や切りたての株水光る
日の丸や楓若葉の屋敷門
仙人掌の花の金粉吹きこぼれ

東京 久留島規子

筍を食むやしやくしやく音たてて
丹沢山も富士山も失せたり蠶ぐもり
昭和の日バザーに並ぶ皿小鉢

緑さす灯明台や海遠く
捨て舟の富士壺ぬらす青葉潮

東京 岡村純子

老鶯や母の夢みて目覚めたる
足軽きひとりの散歩夏に入る
さはさはと樟の新樹や父母のこゑ
軒に触れ日の透きとほる柿若葉
鯛飯のおこげを盛りて夏に入る

東京 桑原優美子

行く春や鯉のつたりと人に寄る
裁つ布の藍香りたる薄暑かな
湘南の海ふくらみて夏兆す
白靴を新調したる歩幅かな
土産なる薩摩切子に冷し酒

東京 三村紀子

マロニエの花降る席へ巴里のカフェ
石畳マロニエの花落つる音
梅雨寒や古き音出すスピーカー
床の間に梵字の軸と紅牡丹
ほうたんの静かに盛る古き墓所

東京 小池 清 晴

散り際の乱調の美や白牡丹
紋黄蝶高さはいつも草の丈
信楽焼の花瓶につんと花菖蒲
黒猫の緑の眸夜の新樹
樟若葉丸ごと覆ふ神楽殿

東京 一由久 美子

稚児百合を揺らす峠の風すこし
逝く春や地獄の釜の蓋あをく
漆塗りの屋根黒々と樟若葉
軽暖や金箔あはき伎楽面
蛇衣を脱ぎしばかりの生き生きと

武蔵野 砂地 宏子

遠き日や母の髪吹く麦の風
緋の影を重ねてゐたる牡丹かな
窓埋む青葉若葉と空の青
熟したる苺のにはひ立ち話
白花を買ふためらひやカーネーション

武蔵野 松井 宣夫

回し飲む部活帰りのソーダ水

ハンカチや抽斗奥にたたまれて
蜆売る浦安なまりの老婆かな
羅をまとふマネキン飾り窓
大声で駆け抜くる子らリラの道

町田 広瀬 俊雄

青鷺の日がな一日畔に立つ
ひるがへり風にきらめく柿若葉
陽炎やレールの錆のゆらめける
キーウィの大葉をたたく走り梅雨
路地裏に金星光る夏の宵

町田 桔梗 純

青ばかりの矢車草や畑の隅
玄関を開くや匂ふ花蜜柑
灯明台包む若葉の揺れやまず
捨て舟の辺に太々と夏蓬
茫々の庭大輪の薔薇ひとつ

日野 喜多尾 明子

万緑や赤子は鬼の顔で泣き
生えそろふ乳齒のきらら夏立てり
図書室の昼を灯して若葉雨

代筆の姉の手紙や花うつぎ
失くしたる鍵はバッグにみどりの夜
机上の蟻われに逃す日殺むる日

横浜 西 本 才 子

麦の秋すぐに抜けたる切通し
揚舟に綱びんと張り和布干す
友が靴ぬげば皆ぬぐ薄暑かな
輕鳧の子の池出づる列続きをり
花束を抱へ姪来る五月かな

横浜 三 木 豊 子

蚕豆の匂と共に炊き上がる
余花の雨格子戸閉ざす茶屋の街
笹の葉のしめり静かに粽解く
昨夜の雨葉元に残し著莪の花
渡し舟土手に待つ間のラムネかな

横浜 星 野 信 子

花は葉に時計の止まる廃校舎
石組へひかり豊かや春闌くる
むらさきの波寄するかに立浪草
農具小屋八十八夜の朝に開け

対岸の高層ビルのかげろへる

川崎 大久保 進

風まかせやがて淋しきしやぼん玉
古都五月さてと茶店のあぶり餅
鈍行の硬き背もたれ麦の秋
日日の今日の好日豆ごはん
幼子の寢息を背に夏の月

鎌倉 恒 川 清 爾

初夏やじゆくじゆく煮立つ朝の粥
A I の若き日の吾花は葉に
子供の日ゆつくり廻る観覧車
風薫る相模の空をグライダー
どろんこの顔は目ばかり田植の子

伊勢原 佐 藤 和 子

土饅頭櫓の落葉の降りつもる
玉解いて雲押し上ぐる芭蕉かな
柿若葉庫裏のカーテン半開き
原っぱに球音ひびく夕薄暑
あめんばう干上がりさうな水たまり
万緑の底川波のまぶしさよ

静岡 大村 峰子

どうだんの鈴鳴らしゆく朝の雨
上京の話弾めり葱坊主
芍薬の蕾百ほど雨に揺れ
深庇整へ燕待つ漢
雨音に朝蟬の声被さり来

静岡 宮崎 知恵美

花すみれコンクリートの割れ目より
さくらさくら平らな道を蹟けり
昼蛙急に賑はふ一枚田
野遊の先頭枝を振り乍ら
水たまり真つ黒にして蝌蚪生まる

静岡 望月 敏男

エンジンのぽんと掛かりて舟のどか
ファスナーの嚙んで動かぬ遅日かな
製材の鋸の唸りや山笑ふ
春一番画鋏ばかりの揭示板
春寒の菓子屋に残る土かまど

静岡 藤原 千代子

ひと夜さの風雨実梅の落ち尽くす

静岡 荻野 加壽子

茶摘終ふ肉たつぷりのカレー煮て
喉鳴らす猫の寄り添ふ三尺寝
虹鱒飼ふ町のどこにも富士の水
庭石に富士の熔岩薔薇香る
大陸のやうな河馬の背春暑し
木の家にも木の香満ち来る夏始
待て解かれ犬の全力夏に入る
栗の花雨に太古の匂ひけり
燕の子けふはパン屋の定休日
一陣の風に遅るる竹落葉

静岡 小川 明美

大正の螺旋階段花の宿
花疲方丈に声掛けらるる
受難節齒科医の床のぎいと鳴く
温泉の送迎バスへ燕の子
大丈夫は魔法の言葉こどもの日

静岡 藤本 節子

むくむくと空を突き上げ山若菜
野遊や幼の手より団子虫

薔薇剪るや袖を放さぬ刺ひとつ
目覚めよき朝餉に添ふる新生姜
すかんばや遅れがちなる花時計

静岡 大 長 文 昭

茶の芽伸ぶ防霜ファンの空回り
切支丹燈籠を蟻這ひ上がる
馬出しの壕へ傾ぎぬ鹿の子百合
湧水へ両手を浸す夏隣
全身をばねに小鮎の堰越ゆる

静岡 加山 ひさ子

亡き夫は企業戦士やメーデー歌
春の夢妣を呼べども声出でず
薄墨の空に消えゆく春の虹
路地裏の子ら騒がしき聖五月
行く春や風に乗りたる樹々の声

静岡 石川 裕子

段畑に海を眺めて春惜しむ
軽やかに子の筆撥ねて五月来る
春大根素直に出汁の沁み込みて
青梅の縁よりピアノ運び出す

母子手帳子に手渡して昭和の日

静岡 本多 ひとみ

石仏を囲み十葉匂ひけり
大漁に笑みやをとこのサンガラス
てんとむし幼の帽に留まれり
からつばの牛舎に積もる夏落葉
夏蝶や法難仏の背を掠め

静岡 杉 澤

修

きっかけは燕の軒の雨やどり
母子草風知る丈となりにけり
山城の深き堀切飛花落花
薄紅の衣を脱ぎて朴芽吹く
山祇のふところ椎の花ざかり

静岡 松 永 博子

筍の根元に残る鉄の痕
緑蔭の杜に砲弾祀らるる
神木の銀杏若葉や天蓋ふ
十葉の白きクルスや水の音
初蟬のじつとひと声昼つ方

射水 成瀬真紀子

春夕焼消えゆく空に星生まれ
夏立つや青空へ子を高いたかい
緋牡丹の夢の真中に緋の一線
母の日や声は乙女の九十路
群れ拒むやうに一本桐の花

金沢 今越みち子

トンネルや遠き出口の若葉光
永平寺日矢の射し込む苔の花
手鞠めく蘭鏝泳ぐ釣具店
教会へメタセコイアの若葉道
椎の花薫る教会ミサの鐘

金沢 伊藤美音子

池尻の水盛りあげて蝌蚪の陣
桜鯛尾鰭に能登の化粧塩
行く末の見えぬ戦や鳥帰る
剝製の鹿の玉眼春遅遅と
町筋へ焙煎の香や花の冷え

金沢 高田たみ子

青梅のぼんと弾くる異人墓

ポケットに失せ物見つけ更衣
籐椅子や戦ひすんで愛子逝く
なつかしき句友の計報白ぼたん
針刺しの母の思ひ出花カンナ

金沢 豊田高子

麦秋や黒牛鳴ける風の径
傘雨忌や鈴鳴らし来る豆腐売
夏木立木洩れ日抱く義士の墓
境内にラジオ体操昭和の日
風の匂ひ日の匂ひ入れ袋掛

金沢 松井佐枝子

この通りかつての銀座鼓草
貯蔵庫と並ぶ廢墟や著莪の花
夏の雨からみ煉瓦の艶深め
老鷲の次の声待つポツポ汽車
銅山に残る煙突山滴る

金沢 石川純子

新聞紙の兜頭に端午の日
鞍おろし浅瀬に立たせ馬冷す
糸蜻蛉光の間にすいと消え

風に乗り肩の高さを夏の蝶
月見草に薄き紅差す風の中

金沢 河野 尚子

白山に猿の雪形仰ぎたる

三百年の満天星の花武家屋敷
金継ぎの猪口の旨酒花筵

夕迫る畑を去りたる雉の声
小流れに飛沫や春菜洗ひをり

金沢 道場 啓子

行く春や空に淡淡ちぎれ雲

清明や亦緋ける師の一書

辿り来し宗達の墓夏鶯

いつまでも青き夕空花杏

※宗達……依屋宗達（江戸期の商家）

達筆の句会案内初燕

金沢 杉本年 虹

蒲公英の絮風に乗り風を呼び

瑠璃瓦耀ふま昼仏生会

紫荊右手を掲ぐイエス像

武家町の用水滾る早苗月

夜の蟻伊万里の肌を迷走す

金沢 南 恵子

瑠璃色の地球へ黄砂降りにけり
掘り立ての筍ずしり胸に受く

苔庭に留石いくつ慈悲心鳥

ラジオより昭和の歌やみどりの夜
明日ひらく笹百合客間明るうす

金沢 松下 信子

ランドセルわいわい来るやチューリップ

桜葉降る振り向かず行く人よ

春深し醬の匂ふレストラン

梧桐の雫に知るや昨夜の雨

旧街道右へ左へ夏燕

金沢 北川 禮子

町薄暑がらくた市に軍靴売る

筍掘り草もて鍬を洗ひたる

八橋の木の香漂ふ水芭蕉

子供歌舞伎袂にはらむ若葉風

医王嶺の見ゆるははがり路を刈る

金沢 清水 英理子

学校に慣れて道草青蛙

緑立つ大寺に靡く五色幕
トランペットさらふ早朝薔薇の園
神域のなんじやもんじやの明るさよ
船旅の荷へ白靴と白スーツ

金沢 松田 好子

雨明けて山車並び立つ港町
辻廻しに沸きたる辻や青葉風
鉄塔を囲む青田の枅形に
母の日に妣の好みし色の花
薔薇園の小さき画家達黄の帽子

金沢 井端 久子

子雀の産毛の取れぬ庭遊び
鯉のぼり荒磯の風にはちきれさう
畦を塗る少年鍬を軽やかに
明王の睨みの眼花は葉に
麦熟るる一揆の里の広やかに

七尾 谷渡 末枝

帰り路ひとり蛙を捕まへて
その下を活断層や甘藷植う
草餅のかをりを啣へ朝市女

能登薄暑工事車輛の砂煙
曾孫誕生
産声を待つ間緑雨のガラス窓

白山 加藤美栄子

山日濃しぜんまい乾ぶ莫塵五枚
吹奏で迎ふる客船パナマ帽
おしろいを塗つて当てなし生ビール
我を張つてへくそかづらに躓けり
貝風鈴そよげるたびに能登恋ふる

敦賀 倉谷ます美

義仲寺へ足むくままの春日傘
濡れ縁へ花舞ふ虚子の忌日かな
木瓜咲くや色街灯り露地に洩れ
花まつり宮の太鼓の回り打ち
蹲の響く夜てらす利久梅

敦賀 鶴田 勝子

芭蕉塚に曾良の碑添へり松の花
蜂忙し土塀の穴を栖とす
遠近の街の灯に浮く花の闇
湖の光をつれて鳥雲に
住宅地一家一樹の花水木

敦賀 中川 雅 月

座禪草達磨和尚の座するかに
袖垣の竹熊蜂の穴二つ
松の花粉新島邸を黄に染めて
鳥雲にまたの飛来を乞ふてをり
街灯の雨滴飛ぶ花苺

敦賀 中村 優

殺氣立ち泣く鴉の子真夜深し
絵符付けし柳行李や鳥雲に
茹で蛸の脚全開で店頭に
緑さす寺の総門曾良忌なる
蜥蜴消ゆ書院の庭のゆふまぐれ

敦賀 為永 香月 枝

雪解風容姿整ふつるが富士
伯父の歌伯母の押絵やかたかご咲く
春眠や柱時計の音遠く
ふくよかに香るハーブや春の宵
果てしなく続く数式日脚伸ぶ

徳島 福島 吉 美

能登の市阿波の竹の子売られるし

瓔珞の小鈴を鳴らす木の芽風
竹串の焼鯖買ひて旅終はる
竹籠に蕨を茹でる荒湯かな
余部の駅長は亀風薫る

徳島 村上 和 義

ふる里は水音ばかり田水張る
眠る児に少し窓開け若葉風
路地裏にロバのパン買ふ夕薄暑
球場はかつて塩田つばめ来る
聖五月産湯の赤児やはらかし

徳島 宮西 修 一

鳥交る社の屋根を転げたり
春雷の二つ目聞いて眠りけり
滑走路歩く鴉の陽炎へる
煙突の「ゆ」の字懐かし鯉のぼり
母の味妻の塩味や豆ごはん

徳島 平岡 功

稚児行列前に後ろに花吹雪
み吉野を散り急かせたる花の雨
春満月大河河口の水鏡

一茎に二花大輪の牡丹咲く
誰彼も眼の輝くや新社員

石井 木内 マヤ

母の日のまだ温みある茹で卵
曾祖父と祖父と父の碑風薫る
紙魚のあとしるき志功の裸婦の笑み
かたときも翅を休めず揚羽蝶
手鏡に若葉の空を映しけり

小松島 岡田 あゆみ

枝撥ぬる重さとなれり雀の子
畳目の寝押しスカート昭和の日
春愁やふらり立ち寄る古本屋
縁立つ隠し二階の武家屋敷
朱の鳥居続く参道蛙鳴く

室戸 安岡 みさき

竹皮を脱ぐ月光に青き肌
柚小屋の夏炬を起こす火吹き竹
大股で来て初鰹置きて去る
ゆつくりとねぢれをほどく花菖蒲
歩くことかくも楽しく風薫る

松山 入河 大河

色白の肌少し見せ麦藁帽
雨脚に動き出したる蝸牛
暗闇に蜜柑の花の気配あり
告白にうらがへる声ソーダ水
ロボットの掃除のあとに武具飾る

福岡 宮田 千恵子

ゆく春やえらべる太き海老フライ
参道の正面は海うらけし
さへづりや寺の裏道植田道
止む前の空の明るさ花の雨
五月かなクリームパンをちぎり食べ

長崎 丸本 祥夫

茄子漬くる赤穂の塩をひとつかみ
教会に沿ふ瓦塀花蘇鉄
太笛や甕の目高の散りぢりに
まさをなる空の際まで麦畑
縁側へ影の増したる釣忍

西海 山下 敦子

とびきたり翅をさまらぬ天道虫

風五月棕の林を吹き抜けり
いくさへの齒止めの九条風薫る
豆飯や雨だれ未だ続きたる
万緑の入江に映る朝かな

宮崎 中山

宣

苔の花ぎつしり覆ふ海鼠壁
一隅を照らす木洩れ日樟若葉
落し文古民家に風吹き溜る
象ヒマリ嫁入りまづか五月晴
黒土を根刮ぎ抜くる夏蕨

宮崎 中山 芳

教

象の鼻棟の花に戯れり
縞馬の幾何学模様薄暑光
百年の孤独の亀か木下闇
黒薩摩の碗に茶柱新茶汲む
花棟舞ひ散る館五智如来

宮崎 鳥居 達

史

赤牛の小道百筋大夏野
ふるさとの尾鈴山に滝のし吹きけり
蜥蜴の子縄文岩に脈搏てり

重機入る住宅工事夕薄暑
放棄田の谷老鶯の声頻り

那覇 中 本

清

放ち鶏走り出したるうりずん南風
小満や膝まで隠す野の深さ
病窓の梅雨の深さやレットイットビー
梅雨鴉模範患者と言はれけり
地下壕に旅人の声や花月桃

那覇 辺野喜 宝来

つきまとふ春の蚊ひとつ御嶽道
車座の上座古老や清明祭
五月鯉首里の古潭の淀みたる
春満月城の薨に低くあり
煎餅の八十八夜の湿りかな

西原 宮 城

勉

日を撥ねて風車悠悠若夏来
新樹光浴びて輪舞の少女像
風落ちて香り密なる樟若葉
人寄せて花伊集かをる過疎の村
村の子の琥珀のはだへ薄暑光

巻見城 渡 真利 真澄

白き花ばかりが増えて梅雨の庭
梅雨茸の傘の散らばる城の跡
赤翡翠の声を遠くに磯馴松
磯臭き拝所の香炉や蟹の穴
夏灯黒塀の山羊料理店

〈お詫びと訂正〉

6月号56ページ上の文中に誤りがありました。
お詫びして訂正します。

(誤) 伊藤文恵 (正) 伊東文恵

万象基金のご報告

江見 悦子様(東京) 一五〇口

全国俳誌協会様(東京) 一〇〇口

匿名 名様(東京) 五〇口

(令和8年5月1日～6月30日・受付)
「万象」の発展のため、大切に使用させて頂きます。

万象俳句会

俳句

8月号
予告

7月24日発売

巻頭作品50句「大木あまり」
作品21句「松尾隆信・津川絵理子」

予価1,500円(本体1,364円)⑧

秀句への荒療治!?

禁じ手の使いどころ

特集

- 総論 「禁じ手」の効果と注意点
- 各論 季重なり／切字の多用／句またがり／字余り・字足らず／直喩／濁音の助詞／観念句・抽象句／略語・造語・新季語／コラム 類句と本歌取り／孫俳句と吾子俳句／犬俳句と猫俳句

採録 特別講座

宇多喜代子を語る

宇多喜代子×西村和子×

小澤實×神野紗希

付録

季寄せを兼ねた俳句手帖 秋

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売! 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

同人作品の佳句

江見悦子選

花束の良き色 卒寿の薔薇の色
 代掻や後先歩むこふのとり
 葉桜の重なり合へる昏さかな
 ねむりつつ乳すふ稚児や聖五月
 糶果てし漁港の黙に水母浮く
 丹沢山も富士山も失せたり霾ぐもり
 机上の蟻われに逃す日殺むる日
 渡し舟土手に待つ間のラムネかな
 あめんばう干上がりさうな水たまり
 大陸のやうな河馬の背 春暑し
 きつかけはつばめの軒の雨やどり
 風の匂ひ日の匂ひ入れ袋掛
 濡れ縁へ花舞ふ虚子の忌日かな
 手鏡に若葉の空を映しけり
 放ち鶏走り出したるうりずん南風

岡本敬子
 上岡佳子
 大月玲子
 三屋英俊
 内田郁代
 久留島規子
 喜多尾明子
 三木豊子
 佐藤和子
 荻野加壽子
 杉澤 修
 豊田高子
 倉谷ます美
 木内マヤ
 中本 清

同人会だより

幹事会報告

同人会幹事長 内田郁代

5月27日、グランドヒル市ヶ谷にて、江見主宰、中村編集長、中條同人会長をはじめ前同人会長の柳澤宗正、元幹事の松原智津子、吉中愛子、万象総務の久留島規子、及び同人会全役員、計17名の出席を得て、幹事会を開催しました。今回は、「万象」誌の編集、校正等の人員不足、高齢化による弱体化等、「万象会議」で検討して来た事案について、「万象」にとって最重要課題であるとの認識から、この件を中心議題としました。

意見は多岐に亘りましたが、結論としては主宰を中心としたワーキンググループ(WG)を作り、人員確保等に向け、これからも検討を重ね、「万象」をより良い方向にもって行こうと言うことになりました。

WGのメンバー候補は北海道・林、千葉・沢辺、東京・松井、神奈川・榎本、静岡・神田、石川／富山・成瀬。7月6日に初会合を実施。

その他の検討議題

◇同人会令和7年度会計報告の他、「万象」、同人会、全国俳句大会会計の三つの口座を一つの会計に纏める事と合わせて承認されました。

◇同人名簿の廃止(昨年の同人総会で提案された件)は個人情報取扱について慎重にすべきという意見もあり、令和9年度以降は作成しないことになりました。

大切なお知らせ

毎月の同人作品の送付先が変更になります。10月25日/切となる「同人作品」(1月号掲載分)より、作品原稿は左記へお届けいただくこととなります。

お間違えないようお願い致します。

〈新しい送付先〉

佐藤和子(さとう・まさこ)

〒259-1132

神奈川県伊勢原市桜台1-28-20

電話 0463-93-3979

万象俳句会

第二十四回「万象」新人賞は、

該当者なしとなりました。

万象俳句会

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(六月号)

榎本文代

消しゴムの汚れを削る余寒かな 岡本敬子

使い古され黒くなった消しゴムを削るといふ日常のささやかな一齣。春の暖かさは一進一退しながらやって来る。「余寒」は、春を迎えているものの残る寒さがあるという意味。同じ内容で「春寒し」もあるが、白さを取り戻した消しゴムの感触は季語「余寒」に添っているように思う。

ゆるゆると吹いて大きなしやぼん玉 高橋ひろ

なつかしいしやぼん玉である。石鹼液を作りストローで拭くと、日の光を受けて美しい色の玉がきらきらと空中に飛んでゆく。大きなしやぼん玉が途中でこわれないように、ゆっくりにゆっくりと吹く子供たちの素朴な遊びだった。

野遊の子にはじめての仔牛かな 増田幸子

もともとは農事のための行事だった「野遊」。現代では野山にお弁当を持って出かける行楽をいう。家族で出かけたピクニック。「はじめての仔牛かな」からは子供たちがおそろのおそろ仔牛に近づいてゆく様子などいろいろ想像できる。そして楽しかった一日が伝わってくる。

菜の花忌雲ゆつくりと丘の上 島田和枝

「菜の花忌」は2月15日、司馬遼太郎の忌日である。句は

小説「坂の上の雲」を彷彿させる。四国松山出身の正岡規と松山好古・真之兄弟を中心に明治時代の群像が描かれた長編である。作者はゆつくりと流れてゆく雲を見上げながら、菜の花が好きだったというこの作家を偲んでいる。

春を逝くたつた一度の紅差して 穂刈照子

作者はお父様を亡くされた。ご家族で温かく見守ってこられたお父様は山本とく江さんのご主人でもある。亡くなった人にほどこす死化粧。悲しみの内にありながら、差した紅に死者の表情が和らいで見えたかもしれない。「たつた一度の紅差し」に深い感慨がこもる。

早春の光吸ひをり奉書紙 藤田裕子

「奉書紙」は純白できめの美しい和紙。礼式文書を始め、木版画などの用紙にも使われる。冬の気配が漂うなかでも、立春が過ぎると窓越しの光は明るく澄んでくる。紙はそのかすかな光を吸い込んでいくかのよう。細やかな作者の感性が窺える。

花冷や牛筋とろり煮えあがる 桑原優美子

桜の花が咲く頃は陽気が変わりやすい。ふいに気温が下がつて薄ら寒いことを「花冷」という。冷える日はあたたかいものを用意したい。「牛筋」はとろ火でことごとと時間をかけて煮ると柔らかくなる。「とろり」においしさが詰まっている。おでんの具材にしたり、牛蒡と焚いたりしてもおいしい。

受話器よりA-Iの声 臚の夜 三村 紀子

A-Iの音声は発音とアクセントが完璧でも抑揚だけは人間に及ばないらしく、受話器を通して声はすぐにわかる。夜にかかってくる電話からの「A-Iの声」は犯罪を思わせて不安をあおる。「臚」は春の月が雲に覆われ万物が霞むさま。進化しているA-Iの未来はなかなか見えない。情緒的な季語が現代のありようと重なる。

あたたかや妻と猫背を笑ひ合ひ 恒川 清爾

仲のよいご夫婦である。暖かい陽気に、羽織っていたものを脱いだ時のこと。お互いを見て笑ひ合っている夫婦の会話が聞こえてくるようである。季節の暖かさとして作者の人の温かさが見えてくる句。

蛇穴を出て地下足袋に固まる 大村 峰子

蛇嫌いの私には出会いたくない場面である。山林なのか、屈強な男たちが蛇を取り囲んでいる。蛇は長い冬眠から目覚めてようやく地上に出て来たばかり。すぐにはすると逃げ出せないようである。うろたえているであろう蛇に、少しおかしみを感じる。

春うららジープで運ぶ結納品 木内 マヤ

都会ではあまり聞かなくなったが、結納は婚約のしるしに品物が交換される儀式。句の「ジープで運ぶ」からは形式にこだわらなくなった現代が感じられる。大安吉日、うららかに晴れた春の一日である。「ジープで」は散文的になるので、「ジープに」としたい。

青空へくつまめ一つ 桃咲けり 宮田 千恵子

空へひびくような大きくしゃみ。「くつまめ」は冬の季語となるが、掲句は「桃の花」が主季語。くしゃみと桃の花には何の繋がりもないが、くしゃみに驚いて花が咲いたと思わせるおかしさがある。青い空と桃の花、色彩から春の明るさが見える。

鯨見の櫓の手摺懸大根 丸 本 祥 夫

ずいぶん前のこと、長崎の生月島に渡ったことがある。田畑が点在するのどかな風景と教会が印象に残っている。そこで鯨漁の話聞いた。島が賑わい豊かな時代だったという。今でも「鯨見の櫓」が残っているのだろう。手摺には干された大根が潮風にさらされている。

桜東風せりふの長き組踊 辺野喜宝来

「組踊」は沖縄で創作され伝承されてきた古典楽劇。白塗りの化粧をした役者が舞台で踊って、唄って、せりふをいう。作者は楽しみにしていた演目を観たようである。長いせりふは聴きごたえがあり、心地よい風に吹かれての帰路となった。「組踊」は沖縄国立劇場で定期的に上演しているようである。

春の雲機銃刺きだす米軍機 宮崎 勉

青い海、サトウキビ畑、ゆったりと流れる時間に沖縄を訪れる人は多い、しかし戦争映画の一場面を見ているような光景に驚く。「機銃」は弾丸が次々に出てくる機関銃のこと。米軍基地が集中している現実を突き付けられる。はっきりと浮かぶ雲がのどかであるだけに、胸が痛い。

鴨の子 紅露恵子

静謐な夜明けの大気北こぶし
立ち枯れの囲む野辺あり揚雲雀
経文の息継ぐあはひ初音かな
引鳥や大河の青に身をゆだね
寂光をまとふ翼や鳥雲に
寄り添ひて鴨の子深き眠りかな
天牛は今生の青とどめけり
水底の闇安らけし河骨黄
凌霄花の散り際の色散りし色
夕風のいざなふ彼方白木槿



自然を身近に感じる喜びと、大切な人たちとの繋がりが私を支えています。

万物流転。生命の儚さとともに、その美しさ、健気さを感じる日々。導かれるかのような句作対象との出会い。それを言葉にする難しさを感じつつ、今日まで続けた俳句。

投句中断もあった私を、さりげない優しさで支えてくださった良太先生、保子さんへの感謝。へ認識と抒情の間に豆を打つを胸に歩みを進めます。「特別作品」に向き合った時間は貴重でした。

金婚旅行

中村

優

借景に瀧を落として魯山人
穴道湖に沈む夕陽や蜆汁
蜥蜴消ゆ石見銀山ゆふまぐれ
露天風呂独り浸りて座禪草
出雲来て卯の花腐し旅の宿
出雲社に蘊蓄語る桜時
刀剣を鍛ふる出雲涅槃西風
春日傘萩焼求め鍵曲
萩城の北の総門松の花
風薫る城下の小路海鼠壁



50年が過ぎた。あの日、二人で星を見ていた。「ずっと一緒に星を眺めていようね」がプロポーズの言葉だったが、妻は覚えていないし気づいてもいなかった。そして今、3人の子供たちも巣立ち、ときどき二人で星を見ている。金婚式と言っても、子供たちファミリーと食事会。そして旅行のプレゼント。マイカーで山陰へ。妻は足立美術館と萩の焼物、私は出雲大社が目当て。縁結びの神様にお礼参り。「50年間をありがとう」と。そんな旅行を、十句に詠んでみた。

宮沢賢治と行く 大内マキ子

後ろ手は賢治のごとし青き踏む

宮沢賢治といえば帽子を被り、外套をまとい、後ろ手を組んだ姿が印象的である。この姿が俯いていること、また早逝したことなどから悲運の人物のイメージを持たれるが、実は精力的に挑戦し活動した人物であった。それ故に生命力のある「青き踏む」が効いている。

山猫軒待てど出て来ぬソーダ水

「注文の多い料理店」に登場する「山猫軒」が宮沢賢治資料館近くにレストランとして再現されているそうだが、この童話はレストランを訪れた二人の客に注文が次々と告げられる。実は客の為でなく客を食べる為の注文と気付き何とか逃げ出そうとするが、その結末はご存じだろうか。さて、ソーダ水は何事もなく作者に届いたのだろうか。

空蟬の骸ころがるデンデラ野

デンデラ野は柳田國男の「遠野物語」にも書かれている姥捨の地。今はのどかな田園地帯らしい。

掲句の「空蟬の骸」が気になった。誕生と死と相反するもの。だがこれがまさに「生きながらに死んだこと」にされた者たちの暮らす場所、「現世でもあり幽界である」この地を指しているのだと思った。

汗だくの婆の掛け声わんこ蕎麦

岩手名物「わんこ蕎麦」。茹でたてを食べてもらうために小さな碗で出したのが始まりとされている。

碗にリズムよく蕎麦を放り込む婆、それを負けじと掻き込む客。婆も汗だくだが客もまた汗だくなのだろう。

阿波の春 平岡 功

渦潮の轟き巻くや阿波鳴門

渦潮とは潮の満ち引きによって生まれる現象である。阿波の鳴門の渦潮はイタリアのメッシーナ海峡、カナダのセイモア海峡のそれと並んで世界三大潮流と言われている。中七の「轟き巻くや」に壮大な景が音と共に読みに迫ってくる。

菜の花の中を満満吉野川

吉野川は高知県と徳島県を流れる四国一の川。流域に恩恵を与えてきたが暴れ川としても知られ、現在は堤防が築かれている。そこに植えられた見事な菜の花との取合せが良い。「中を満満」が吉野川の景を如実に表している。

春雷や夜半漆黒眉山現る

「万葉集」に「眉のごと雲居に見ゆる阿波の山」と詠われた「眉山」。どこから見ても眉の形だそう。

春雷により一瞬間が開け眉山のシルエットが浮かび上がった。何とも美しい景である。掲句は「夜半漆黒」を「やはん」と読ませているが、こゝは「よわ」と読ませたい。「夜半漆黒の」としてはいかがだろうか。

潜水橋杖を小脇の徒遍路

「潜水橋」とは台風などで増水した際、流木や土砂の衝突、堰止めを防ぐため水中に沈むよう作られた欄干などの無い橋。これは徳島県の名称で高知県では沈下橋である。

今はバスでの遍路ツアーも盛んだが、昔ながらの徒遍路は貴重である。確か橋の上では杖を突かないと伝えられている。その景を「杖を小脇の」と写生された。

私のこの一句

蛇神の老樹へ卵盆の月 倉谷ます美

小浜市の西津地区は、漁師町で辻々に地藏堂があります。

ある地区では、地藏盆の最中に古木に蛇神さまを祀り、お供えの中に生卵5個も上がり、子供たちは般若心経を称えます。隣の地区では、子供たちが主役となりお地藏さまを海で洗い、化粧をする習いがあります。当日集会所では、化粧地藏とお供物を飾り、施餓鬼幡を掲げ「まいってえね」と道ゆく人をお誘います。大人たちの称える般若心経と鉦・太鼓が響きます。漁師町ならではの信仰心の篤さとが混然一体となり、珍しい行事として引き継がれてゆくことでしょう。

うりずんの風艶やかに陶器市 宮城 勉

「うりずん」は沖縄の古語で、旧暦2、3月の麦の穂の出る頃のことを言い、この頃から南風が吹き始め万物が潤うとする地方季語。その時期に陶器市に出会った時の句である。

沖縄の陶器は「やちむん」（焼物）、「壺焼」などと呼ばれ、はつてりとした厚みと独特の絵付けに素朴な風合いがあり、琉球王国時代から伝統を受け継ぎながら、沖縄の自然や文化を反映したデザインに特徴がある。

陶器市で「まかい」と呼ぶ日常使いの碗を手にとって、その持ち重りや釉調と絵付けのしつとりとした艶を愛でているとき、折からのうりずんの風の潤みとが映発して生まれた句で、沖縄の季語を、物を通して生かし得た句と思う。

鵲の贅まだ黒黒と蜥蜴の目 藤本節子

令和7年3月号で、幸いにも江見主宰の佳句に選んでいただいた一句。

鵲の贅の乾びたものは、以前吟行の折に見たことがあったものの、このように生々しく今し方串刺しにしたような残酷な姿のものを見たのは初めてのこと、足が竦んでしまった俳句を学んでいなければ直視出来なかったに違いない。吟行の楽しさは、このような思いがけない出会いと一瞬の感動。「黒黒と」に、時に非情とも言える写生に向かう姿勢が頼もしい」との選評をいただいた。目に焼き付けたモノを表現したことへの評価を嬉しく思った。

沢木欣一の指標と信念 (二)

中山純子

(承前)

これに続き模倣の句、字余りの句、抽象的な言葉の句の弊害にふれ、実作上心がけるべき注意がこまごまと記されている。長くなるので割愛するが、この年、欣一は三十二歳。明治三十年に子規が三十歳の年、写生句の方法論として示した「俳諧反故籠」(俳人蕪村)から約半世紀五十五年の歳月を経ていることになる。「総じて写生を有の儘に言はゞそれに対する自己の感情判断などは言はずとも、読者は能く之を想像し得る者なり」(俳諧反故籠)とした子規の写生の基本は、これを継承した高浜虚子を軸として、やがては枝のいくつかに岐れ、あるいは水原秋桜子の、高野素十の、阿波野青畝の、それぞれの個性による概念、方法の小差などによって多少の変化を経てはきたが、子規の本意はそののちも、見えず隠れつつも太い精神となって享受されてきていることが、欣一選後感からもあきらかである。

沢木欣一主宰誌となつてからは、「風」の方向は一貫して写生重視の姿勢をくずしておらず、平成八年、創刊五十周年を迎えた時点では、子規からみればすでに遠く百年余を経たわけだが、子規本人が意識した以上の重量感をもってその識見は、「風」の中では現在も思ひつき、

実作上の基本指標となつていられると思われる。

もつとも、明治という輝かしい創世にも似た光の時代を生きた子規と、開闢以来はじめての国家敗れるという屈辱を味わい、どん底の混乱と飢餓の中において発足した「風」は、おのずからその時代性という意味において苦澁をひきずらざると得ない理由があつたわけである。何よりも作品がそれを物語っている。

おびただしき靴跡雪に印し征けり 沢木 欣一
元日の夜の旗なびく音すなり 原子 公平
川を見て老人立てり終戦日 林 徹

この三句は、『風俳句歳時記』(五十周年記念出版)から抽出したもの。最初の句は欣一代表句の一つである。一句目、二句目とも、戦いの末期の、もはや日常性としての戦争へのかけりが、リアリズム(写生)を通して感性の張りや緊迫感をもって伝わってくる。三句目は、広島での詠として受けとめるとき、時代の正確な反映、老人と川の対峙に格別の感慨がこめられているのが知れる。たとえば、原爆忌が昭和の敗戦を契機に動かぬ季語として定着している事実を、子規はどう見るだろうか。ほとんど生涯をかけて「俳句分類」に膨大なエネルギーをつぎこんだ正岡子規からの百年の距離は、やはりはかりしれず長く遠いことを思い知るのである。

『子規・写生―没後百年―』(沢木欣一編 角川書店より抄出)

(次号に続く)

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ③⑥

橋本 清

振り放^さけて 三日月見れば

一目見し 人の眉^{まゆ}引き 思ほゆるかも (六・九九四)

「振り仰いで三日月を見たところ、一目見ただけのあの人の眉引きをした眉が思い出され、頭から離れないことだ。」

大伴家持の歌です。天平5年（七三三）、作者16歳の作と推定されております。

「眉引き」は、眉毛を抜き、眉墨で眉を引き描くこと。また、その眉。古代の成人女性の化粧です。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりのうちけぶり、いはけなくかいやりたる額^{ひま}つき、髪^{かみ}さし、いみじうつくし

(源氏物語 若紫)

「(その少女の)顔だちはとてもかわいらしい様子で、眉のあたりがほんのりとしており、あどけなく掻き上げた額の形や髪の具合が、たいそうかわいらしい。」

光源氏が少女若紫を小柴垣の隙間から覗き見ている場面です。子どものうちは生えたままにしているの、眉の辺りがぼうつと煙ったように見えたということです。

家持がかつて一目見た女性は成人したばかりで、眉の引き方も控えめで薄かったのでしょう。だから、三日月のよ

うにほのかに見える、その初々しい美しさが目に浮かび、急に心を強く引かれるようになったというのです。

それまでも胸の奥底にはあったのだらうけれど、三日月を見て、彼女のことを思い出し、恋しい思いをはっきりと自覚するようになった。初恋、まだそんな言葉はなかったけれど、これは紛れもなく初恋の歌です

16歳の家持が、目鼻立ちよりも化粧として描いた眉に心を奪われたように、近代詩人島崎藤村も少年の日の初恋の思い出をこう歌っています。

初恋

まだあげ初めし前髪^{まへがみ}の

林檎のもとに見えしとき

前にさしたる花櫛^{はなくし}の

花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて

林檎をわれにあたへしは

薄紅^{うすべに}の秋の実に

人こひ初めしはじめなり

(『若葉集』明治30年)

髪を結い上げ、一人前の女性への第一歩を踏み出したばかりの少女。少年藤村も、彼女の容姿容貌より、結い上げたばかりの初々しい前髪の辺りに強く心を引かれています。



万象ノオト

テーマ『川』



善処します

武蔵村山 松井宣夫

小松川句会の会場近くに善処町会という看板が立っています。郷土研究者によると、名前の由来は明治初期の川をまたいだトラブルからだそうです。

江戸から明治にかけ、舟を使つての輸送が盛んな時のことです。小松川から対岸の亀戸に運び込まれるのは農産物です。帰りは商業製品が小松川に渡りますが、運賃が農業側には高く商業側は安く設定され、不公正なことが続きました。ある日、小競り合いから町を挙げての大喧嘩に発展してしまいました。その時に仲裁者として入ったのが博徒の親分で、「悪いようにしない善処する」と云ったことが町の名の由来

とか。

しかし「善処する」約束は守られることもなく、日本の外交基本、有耶無耶に終わったのです。

清流・安倍川

静岡 松永博子

安倍川は静岡市中央部を流れている一級河川である。急流で洪水が多いため、室町時代には今川氏が流路を現在の位置に誘導。徳川家康が島津忠恒に命じて「薩摩土手」を築かせるなどして治水を行い、城郭都市・駿府を誕生させた。安倍奥の梅ヶ島金山や林業の輸送路、東海道の交通の要所として発展し、静岡の歴史に欠かせない。

その安倍川は環境省選定「平成の名水百選」にも選ばれている。関西出身の知り合いが、安倍川河口近い親水公園に子ども連れて遊びに行き驚いていた。「河口に近いのに澄んでいて、安倍川ってホンマきれいやん。びっくりしたわ」地元の人間には見慣れている流れ。全国的には、「安倍川もち」と言う名物の方が名前が通っているけれ

ど、その水の美しさを改めて自慢したい。

新発田川

静岡 長谷川洋子

出身地の新潟の実家の後ろに新発田川が流れていました。新発田市から新潟市まで続く川です。祖母はその川はかつて輸送の役目をしていて色々な物資を運んでくれた大切なものだったと話していました。春は土手に蓬が生え、母と摘み、母が蓬餅を作ってくれて家族みんな大喜びで食べました。夏は螢が飛び交い、家族で近くの橋まで見に行き、その淡い光が飛んでいるのが幻想的でした。その後、農業の影響で螢は見えなくなりましたが……。

昭和41年集中豪雨に遭い、家は床上浸水し、小学校に避難したこともあり、自然の怖さを思い知らされました。その後放水路が作られ、現在は改善されました。川は生活に密着していると改めて感じました。

朗朗と舟唄流る谷空木 志木 森山洋之助

客待ちの釣舟舫ふ走り梅雨

独り居の窓は全開若葉風

若葉風木洩れ日踊る並木道 千葉 加藤浩子

海月浮く朝の光のやはらかし

○朽ちかけしベンチにひらり藤若葉

縄文のギャラリーを出で鳥の恋 高田みや子

山葵播る静かにの字描くやうに

送別のあまたのことば花の雨

五月来る就活生のローヒール 高田みや子

知覽てふ新茶の喉にじんわりと

○神輿過ぐ神田の街にカレーの香

薫風や誕生石はエメラルド 成田 宮本うらら

黄金週間我ら平和の国に生き

垣根越し境界の無き夏の草

城山へつづく裏道桜の実 酒々井 小林あけみ

断崖の「お万布ざらし」春の潮

山桜校舎の裏に山羊放つ

噛み締むる生きて病床新樹の夜 佐倉 新谷八郎

麦秋や灯ともし頃を人の影

頼りなき試歩の一步や陽炎へ

ふるさとの各駅停車桃の花 佐倉 有泉正夫

校門へスキップを踏む入学児

出刃を研ぐ妻の手白く夏めけり

きらきらと東照宮に春の風 杉田富美代

小雨煙る枝に木蓮菩薩めき

譲り受くる真紅の牡丹咲き出せり

○流れより後れて曲がる花筏 鈴木隆久

夕暮の湖に濃き影蜩舟

眠たげに何処で鳴くや牛蛙

春の野になにやらつつく小さき背 鈴木美根子

指先からこぼるる春やピアノ弾く

口中に飴ころがして四月尽 船橋 近藤澄子

風鈴の音きれぎれに昼下り

夏落葉あまたを踏んでみたりけり

緑蔭に夫の写真と座りたる

夏隣珈琲少し薄く淹れ 山口秀吉

葉陰より子雀こぼるる朝かな

春風やデイサーピスに異邦人

万緑のふくらむ杜や水の音 柏 鹿毛満子

ピクルスの青き香りや今朝の夏

東京 蕪木静子

若葉風読経の窓明けはなつ

松戸 石川幸子

春疾風ぐいぐい背中押されけり

川面より春夕焼の美しく

北口富栄

落椿花弁たちまち緩みけり

よなほこりさらつと拭ふベンチかな

ペン折ると告げたる友や春闌くる

石川幸子

卯波立つ海辺の宿の黒瓦

齊藤孝夫

鉢植ゑの蝶の幼虫見守れり

辛党の餡こも好きと柏餅

落雷やペンの手止めて息とめて

山寺の法灯揺るぐ春初め

改札に再会約す四月尽

あちこちと医院通ひや白日傘

寿多映子

花片は裏と表と見せて降り

高野翠子

車椅子押す母の背や春の虹

快晴や口いつばいの春キャベツ

食休みの目に入る一樹遅桜

へラクレスの弓新緑の空を射る

渡部洋子

囀や空の群青どこまでも

○銀色の風にはぐるる茅花かな

柿田川富士に生まるる苔清水

鶴田智美

リラ咲きていつもの道のなつかしく

古びたる母の箆筒の夏衣

暮れゆける小径の明かり濃山吹

東京 安藤美酒々

スカートをひるがへしたる夏の風

柿若葉土塀の中の農の家

葉桜のささやき聴きつバスを待つ

新調の白服高層レストラン

中澤桃子

天見上げひたすら真直今年竹

大場八朗

鉄柱を覆ひ蔓巻く鉄線花

風よ吹け飛ぶ勢ひの鯉鱖

築山の紅白つつじ蕊長し

橋本紀代子

花あやめ粹な虎斑の濃紫

紙飛行機泰山木を越えてゆき

紙飛行機泰山木を越えてゆき

新茶の香名を尋ねたる人の居て

溜池の濁りに群るる蛙の子

東京

長谷川信也

○強面のうるむ目頭花粉症

筏組む隙なきさくら吹雪かな

切株の回り埋むるつつじかな

自転車の力士ステテコ覗かせて

春疾風白波のたつ露天の湯

やや目元尖れる猫に春の雨

尻尾振りまた振る猫よ立夏なる

海峡を争ふばかり明日立夏

野薊の風に震へる土手の上

土起こせば蟬の幼虫眠りをり

ブッチーニの歌声響く春日差

いつの間に緑眩しき櫂かな

おほいぬのふぐり夕にはしばみけり

級友と共に老いたり花は葉に

春光に銀波満つるや安房の海

三鷹

植村康子

○近く友の小さき手の皺郁子の花

春の窓マトリョーシカと目の合ひて

石段に続く石段新樹光

高尾早弓

洞窟に絶えぬ水音夕涼し

洞窟を出でて太平洋の初夏

パズルまだ解き終はらずに初夏の窓

三鷹

南場雅子

クレーンの夏青空へ届きけり

文旦のにがみと甘さ高知より

城跡に銀鱗飛ぶや鯉のぼり

府中

竹村晃子

夕闇に空木の花の香りけり

雪溪に亀裂の走る山の音

行く春や友とゆつくり女坂

日野

松原悦子

○母の日や畳紙に妣の筆ありし

こどもの日落書あまたなる絵本

花冷やフードコートに店一つ

青梅

横井一美

大輪の花のごときや春キャベツ

無人駅線路の横に白すみれ

子供の日家族一斉ツーリング

横浜

大駒泰子

腸はほんのひと掻き桜鯛

通り過ぐれば茉莉花の匂ひくる

梅の寺季重なりの句掲げあり

加藤和子

芝原の中に小堇色極め

地に届く藤満開や虻来る

花楓揺れ故郷の阿弥陀堂

横浜

坂本具子

大震災越えし白砂初夏の波

○初夏の風ネモフィラの丘過ぐる

面つけて手踊り舞ふや観梅会

柴田雅春

青鷺や天神の池動かざる

雛の夜嫁ぎし娘偲びたる

長野高朋

晴天に色さまざまの木の芽かな

春の雪ずしりと受くる垣根かな

豊美佐子

こぼれ種の菜の花の咲く小道かな

三輪の久留米つつじのほのかな香

○卒業式胸にピンクのスイートピー

豆腐の喇叭真昼の街薄暑

茅ヶ崎

久保田富士子

淡竹の子荷物はみだす旅帰り

○春の星呼べば返事のありし人

松田

古谷悠紀子

夜も昼もひとりなりけり桜散る

春深し山のかたちの暮れ残る

産土へ手合はす肩に道をしへ

静岡

飯田優子

○仏無き台座の苔に瑠璃蜥蜴

溝浚ふ農婦の額へ夕の闇

「前略」で始むる手紙新社員

静岡

石川直樹

卒業や方程式は解けずとも

初めての駅に桜や一人旅

一斉に鴉飛び立つ梅雨の空

石川真利子

雨あがり薄雲覆ふ夏の月

半袖に折りじわのあり夏近し

住職の白衣の眩し富貴草

伊東文恵

○尼寺の薨てらてら柿若葉

ここだけの話の弾むさくらんぼ

山桜プラチナ色の並木道

海野俊彦

のどけしや手乗りいんこの喋りだす

桜湯のほのかな香り祝ひ膳

バス待つや背をくすぐる春の風

大木政子

親と子の飾胃の並びをり

檜若葉垣根の隙を埋めけり

せせらぎに耳澄ましたり花の山

奥川裕美

釣竿の先を見つむる花見客

樟の幹の太さや雲の峰

種芋のぬくぬく眠る土の中

小林典子

せせらぎの風や紅梅ひらく朝

ウオーキング春めく日差し背に受け

静岡

杉田義則

峠越ゆ甲斐は杏の花ざかり

落ちてなほ見得を切るなり紅椿

花見客縫つてスーツの男かな

杉山已代

蒲原の旅籠の土間の吊し雛

笠上ぐる親鸞像や青嵐

笑ふやう天に向かへる朴の花

高井明子

富士を背に薩埵峠の花みかん

青鷺の杉のてつぺん動かざる

若葉時茶店のジャズに膝拍子

田中秀幸

城跡にフォーク流るる清和かな

夕風にひととき磯の香を増せり

春空に睫毛の長き麒麟かな

内藤允昭

交叉点マスクの波の動きけり

苗札を立てて老妻腰伸ばす

肩口へ触るる花影築地堀

中澤祐一

可惜夜や湖にたゆたふ花明り

お稲荷の揚げにひとひら花の宴

短夜や介護の灯消さぬまま

長島富美子

歌声を残して逝けり月見草

校庭の子等にそよげり立葵

鬼やんま龍棲むと言ふ池めぐる

静岡

永島美佐子

大海の鼓動を探る夜釣かな

さよならと言へぬ二人や夏来る

おほでまりばんぽんと手にはじけたり

和菓子屋の軒を借りたる燕の子

摘はぬもほんのり甘く豆の飯

蜥蜴出でによりりと石を跨ぎたり

狛犬の口を塞ぐや蜘蛛の糸

赤煉瓦の隧道を抜け著莪の花

新社員母へ名刺の一枚目

福島章友

神木の荒ぶる枝や木下闇

サンガラスかけ飼犬に吠えらるる

薬膳の今朝の一汁春キャベツ

焼津

小梁洋子

湯の沸きてととのふ茶席藤の風

○麦青むいつもとちがふ道に出て

蒲原宿屋根から屋根へ囀れる

掛川

鈴木美由紀

照り返す本堂の屋根八重桜

立ち話に割り込む蜂の唸りかな

取り取りのリュックの色や春うすら

異奇

鈴木裕一

大木の辛夷の下に占ひ師

苔庭の書院に香る沈丁花

○世界中戦禍の火種春疾風

金沢

上野富貴子

髪整へ合せ鏡の春シヨール

好物の菜飯炊く香や夫忌日

つつじ咲く朝に夕にと色変へて

竹藪に竹の子そのまま伸びてをり

いちじくの硬き実に早出合ひたり

○オペラ歌手のどの奥まで見せて夏

塀越しのむらさき式部満開に

早口のつばめ消えたりしなやかに

潮騒の耳にやさしく松露搔く

満開の桜の涯の遊女墓

春疾風『嵐が丘』を覗し夜は

○肩に触れ風の形の糸桜

田起しを追ひかけ回す鴉どち

倒木の苔のまだらや遠郭公

夕映えの懸樋の横の姫女苑

そよ風にふはりふんはり若楓

草むしり終へて早葉の青々と

かほく

能任康子

大試験孫の進路に迷ひなく

雪吊解く庭師へ小昼運びけり

山裾の筍流し夜の明くる

白山

鶴尾正江

武者人形飾る父子や床広く

葉桜の透けし緑に憩ひたり

紫の母衣かけ尾瀬の座禅草

敦賀

川口和代

街灯に重たき吾の春愁

故郷の味はらからと蜆汁

母想ふ会へぬ日の数カーネーション

奈良

町田すみれ

琴の音や賀茂曲水の風に乗り

吉野山背負ふ秘仏や飛花落花

新しき句会誕生けしの花

徳島

山本晴美

あたたかや夕餉のメニュー変更す

花も良し野菜も旨し春惜しむ

○小気味よく寝落ちせし子や春炬燵

山本瑤子

まんさくの花びら解くをまぶしめり

山ざくら眼下に街の灯のともる

白といふ色の華やぐ夕牡丹

三好

内田孝子

鳥交る日はとろとろと波の上

春潮や国生みの島真向ひに

三好

細田良子

御朱印は桜の切絵春の雲

小判草じやらじやら鳴らし山下る

福岡

園田清子

鍋の中小粒の新じやがころころと

てつぺんに鴉の巢あり風そよく

雨音の無き耳の日や雛の夜

鶴田輝代

母の忌や鶯の声しばし聞き

満開の花に埋もるる納骨堂

十歳の手編みマフラー宅急便

大野城

美山留唯

火の用心煉瓦造りの格納庫

なかなかの手際に捌く桜鯛

乾漆の輪花の器光悦忌

美山留唯

吾子の手を双手に包み春の月

○入り彼岸粉屋弛まず粉を引く

夏めきてみな微睡める動物園

門川

請関ゆかり

梅雨に入る狭き獣舎に虎二頭

くもざるの尻尾自在に若葉風

朝まだき木木に溶け込む山桜

国富

山口孝治

まなかひの一本桜三分咲き

国道の家路賑はふ山桜

若葉風妻の歩みのやや楽に

那覇

稲嶺有晃

斑の猛る鬼百合の野を戻りけり

時を待ち伊集咲く夜の闇白く

遥拝の香炉へ一葉春落葉

高嶺容道

母の日のライスカレーや万国旗

走り梅雨どの子も黄の雨合羽

火焰木の花どつしりと雨のなか

宜野湾

宜野 顕

○村だての樋川に雨後の夕螢

弥撒あとの貧しき庭や百合の花

花冷や足湯の先の赤城山

ベリッ

森尾 舞

咲き満ちて花の雨なり神田川

○列車待ちかつ込む蕎麦や新社員

〈お詫びと訂正〉

7月号61ページ中段の作者名に誤りがありました。
お詫びして訂正します。

(誤) 鹿毛満子

(正) 田中道江

北から南から

瓜割の滝・鯖街道を吟行して

福井 鶴田勝子

令和7年10月25日、敦賀万象俳句会は、まつかぜ俳句会と合同で吟行会を行った。

まず福井県西部に位置する若狭町の新徳寺、瓜割の滝を訪ねた。

新徳寺は奈良時代に開かれた古刹で、後に村上天皇の勅願寺となり、この時代の年号にちなみ新徳寺と名付けられた。

弘法大師の夢告を受け造立された四国八十八カ所の霊場の石仏がある。

また、新徳寺の山裾より湧き出る岩清水は瓜割の水と称し、全国名水百選の一つで、霊泉として知られている。その由来は言葉の通り、冷たさのあまり冷した瓜が割れたということから来ている。

あふれ湧く瓜割の滝雁渡る	倉谷ます美
冬ざくら水音聞きて石仏	鶴田勝子
大水車軋む音して山眠る	中川雅月
瓜割の凍て滝水車ゆるゆると	中村 優
百選の水汲みに来て銀杏散る	為永香月枝
若狭路に名水湧きて山眠る	川口和代
瓜割の滝の水くむ暮の秋	中道千代江
瓜割の苔むす岩や蛇穴に	中村恵理子

次に訪ねた鯖街道は、小浜市の泉町を起点として、熊川、朽木、大原、八瀬を経て京都までの街道で、「京は遠ても十八里」の言葉どおり、72キロメートルの道のりのことである。小浜に水揚げされた海産物を運んだ道で、主として一塩した鯖を背負い、京に届けたことでこの名が付けられたという。熊川宿は若狭と近江との国境に位置しており、昔より交通と軍事面の要として重要視され、陣屋や関所が置かれ、往來する旅人たちの宿場として栄えた。今も関所跡が復元されている。また、熊川は古くより葛を精製して京へ届けていた。

名水に生くる熊川櫨紅葉	倉谷ます美
冬日濃し残る番所の弓鉄砲	鶴田勝子
義民の碑村おしなべて冬に入る	中川雅月
京からの文化を宿す鯖街道	中村 優
句心を唆る宿場の芋水車	為永香月枝
葛湯吹き格子戸に洩る鯖街道	川口和代
熊川の時をつなぎて葛を掘る	中村恵理子

当日は天候に恵まれ、往時の旅人たちに思いを馳せた有意義な一日だった。

掲載の句は後日の句会で発表されたものである。

俳人協会創立65周年記念

第65回 全国俳句大会

◆日時・9月8日(火) 正午開場 午後1時開会

有楽町朝日ホール(入場無料)

東京都千代田区有楽町2-5-1

有楽町マリオン11階

電話 03(3284)0131

○交通 J・R有楽町駅中央口または銀座口・地下鉄銀座駅C出口・地下鉄有楽町駅D・E出口

◆特別記念講演 講師 阿辻哲次

京都大学名誉教授 漢字ミュージアム館長

◆当日句会

☆大会当日参加者より1句を募集、当日選者による選を行い、各選者特選3句講評ならびに特選賞、入選15句には入選賞を呈します。

☆投句締切1時・会費無料

【当日句会選者】(五十音順)

井上 弘美・今瀬 一博・小川 軽舟

鈴木しげを・高田 正子・藤田 直子

主催 公益社団法人俳人協会
後援 朝日新聞社

令和9年版 俳人協会編「俳句カレンダー」

内容 裁 A4サイズ(二つ折)
表紙 後藤比奈夫

水原秋櫻子・西山 陸・加古宗也・榎未知子・望月 周
阿波野青畝・西村和子・依田善朗・鈴木貞雄・蘭草慶子
鈴木榮子・尾池和夫・遠藤容代・庄田ひろふみ・太田土男
藤本美和子・高田正子・栗田やすし

表紙を含み487句

「万象」からは江見悦子・中村千久・柳沢宗正の句を掲載

頒 価 1部 1,000円
送料 1部 350円
2部 400円
3部 450円

◆4部以上については冊数、発送先によって異なる(宅急便)

発送予定 10月初旬より(俳人協会から直送されます)

申込先 〒113-0021 東京都文京区本駒込6-5-14 206 桑原優美子

電話 080-1548511626

メール yunko.98@icloud.com

申込締切 令和8年9月5日(土)
発送先の住所・氏名・電話番号・申込部数を明記のこと

*なるべくグループでまとめてお申し込みください。

*後日、代金と送料を請求しますので、左記に送金願います。

○ゆうちょ銀行より振込の方

ゆうちょ銀行【記号】10150【番号】11568581(通常預金)

○他の金融機関より振込の方

ゆうちょ銀行【店名】018 ゼロイチハチ

【口座番号】1156858(普通預金)

【口座名義】砂地宏子(スナジヒロコ)

万象作品の佳句

江見悦子

蒼天へ巨大帆船夏つばめ 小松島 田上幸子

「蒼天」の「蒼」は濃い青色。その空に向かって巨大な帆船（マスト）が真つ直ぐに伸びている。港に停泊している大型練習帆船の「日本丸」だろうか。水面から50mあるという帆船には、下ろされた白帆がきつちりと畳まれて固定されている。甲板を、帆船を、夏燕が自在に飛び回っている。名詞を多用してきつちりと言いつつ留めた、爽快で気宇壮大な句。

宍道湖の夕日待ちある春シヨール 那賀川 高山ひさ子
島根県にある宍道湖は全国で7番目の大きさの汽水湖。嫁ヶ島の浮かぶ湖の夕景は「日本夕日百選」にも選ばれている。一日の松江散策を終えて少し肌寒くなって来た夕方、春シヨールをまつて夕日を待っている作者。季語の「春シヨール」にやわらかな旅情を感じる。

休刊を告げたる電話花の雨 三鷹 高尾早弓
親しい友人から、勤め先の雑誌の休刊を告げる電話があった。作者も関係していた出版社なのである。かつての活気ある編集室の様子を思い起こしている作者。「花の雨」という季語に愛惜の情を感じる。季語の力である。

いつせいに羽搏きさうな山法師 柏 村田由美子
ヤマボウシは初夏を代表する花木。茂った葉の上に浮かぶ

ように花開くが、純白の花びらに見えるのは総苞片である。「羽搏きさうな」には、梅雨時を吹き飛ばすような「山法師」の活気と美しさがある。第二代主宰の大坪景章先生は山法師の花がお好きだった。事務所のあった平井の、山法師の並木道を通る度に先生の笑顔が思い出される。

鳥曇ひひらぎ垣の古墳山 佐野 義本美智江
「ひひらぎ垣の古墳山」とは珍しい。大切に管理され守られている古墳なのだろう。古墳山の上には春の曇り空が広がっている。渡り鳥が北へと帰る頃である。古墳時代の人々も空を見上げていたに違いない。「鳥曇」の季語が成功した。

上げ潮に逆らひ河鵜滑走す 徳島 林 早苗
鵜には河鵜と海鵜の2種類がある。どちらも全身が黒いウ科の水鳥。河鵜は河川や湖沼、海鵜は海岸や岩礁地帯で生活する。くちばしの黄色い付け根の形で識別できるように海鵜の方が一回り大きい。鵜飼で使われるのは海鵜。

掲句は、満ち潮の川の流れに逆らって河鵜が滑るように走っていく様を活写したもの。瞬間の河鵜の行動を言い留めた写生句である。「逆らひ」が面白い。

卯の花や夕暮時の人通り 横浜 岡 元枝
卯の花は「空木の花」の略。万葉時代から盛んに詠われて来た。小学唱歌にも「夏は来ぬ」があり、人々の暮しに根付いている。掲句は「卯の花」と「夕暮時の人通り」の取合せが良い。暮しの気配のあるあたたかで懐かしい趣の句。

神輿過ぐ神田の街にカレーの香 千葉 高田みや子
神田の街を通る神輿と言えば、神田明神の「神田祭」だろ

う。京都の祇園祭、大阪の天神祭と並ぶ「日本三大祭り」の一つであり、「江戸三大祭り」の筆頭に数えられる格式高い祭りだ。いつもは学生で賑わう古本屋街も、今日ばかりは祭り見物の人々で混みあっている。そこに漂ってきたのがカレーの香り。神田にはカレーを専門とする店が多い。日本の伝統的な祭りと異国の香りのカレーが共存していることの面白さ。今の社会の多国籍化を象徴しているようだ。

銀色の風にほぐるる茅花かな 松戸 寿多映子

「茅花」は茅萱の花穂、春が開けて来ると野原や路傍に銀白色の穂が目立つようになる。その内に花穂がほうけて風に揺れて絮が飛び始める。その美しさを「銀色の風にほぐるる」と詠んだ。対象と一体化した写生である。

強面のうるむ目 頭花粉症 東京 長谷川信也

「花粉症」が「杉の花」の副季語で春。今や国民病とも言われる花粉症は、戦後の杉の大量植林や生活環境の変化が原因とされ、春先になるとくしゃみや鼻水、目のかゆみで多くの人が悩まされている。この句、いつもは怖い顔つきの剛の者でも花粉症にはかなわず、目頭を湿らせているという場面を詠んだ。諸誰の効いた、俳味のある作品。

初夏の風ネモフィラの丘過ぐる 横浜 坂本具子

ネモフィラは、鮮やかな青い小花を咲かせる北アメリカ原産の一年草。季節には青い絨毯のようになり、大勢の見物客が訪れる。この句は丘一面にネモフィラが風にそよいでいる光景。さわやかな初夏の時間を詠んだ。

仏無き台座の苔に瑠璃蜥蜴 静岡 飯田優子

かつては仏像が安置されていたのだろう。今は石の台座だけが残っている。苔むしたそこに瑠璃蜥蜴がやって来た。湿りを味わっているのか動かずにいる。鮮やかな瑠璃色が苔の緑に鮮やかだ。色彩の対比と、空間の把握の確かな句。

列車待ちかつ込む蕎麦や新社員 ベリ 森尾 舞

新しい年度を迎えると、新調のスーツで身を固めた、一目で新社員と分かる若者が目立つようになる。掲句は列車のホーム、予定の時刻にぎりぎりになってしまったのか、昼食の駅そばを啜っている。似たような場面は誰にでも経験がありそうだ。「かつ込む」に、作者の発見がある。

＜ご協力をお願い＞

毎月の投句作品が札幌に届くと、担当の林陽子さんが一通ごとに到着の日を書き入れ、「万象誌」掲載の順番に並べ、県別の人数を確認したまとの表を作成して江見まで送ってくれます。東京到着は決まって毎月21日の夜になります。

その後、明窓浄机とはいかないまでも選句セットを揃え、静かな時間を作って選句に集中します。印刷所に廻し、2回の校正を経て「万象」誌が完成しますが、皆さんに是非ともご協力頂きたいことがあります。

- ・ 所定の投句用紙を使い、升目に一字ずつ記入する。

- ・ 鉛筆や水性ボールペンや消せるボールペンは使わない。

- ・ 楷書ではつきりと書く。

- ・ 締切日を守り、訂正のないよう投句用紙に消費する。

気持良く皆さんの句と向き合えるよう、協力を宜しくお願いします。なお、通信欄を活用して下さいね。

新中央句会報 (5月例会)

令和8年5月24日(日) 大妻女子大学

(出席17名)

江見悦子選

芍薬の色を隠さぬ玉蕾 奥 太雅

天道虫葉の雨粒に翅広ぐ 吉中愛子

鈍行の硬き背もたれ麦の秋 大久保 進

雨晴れて町翠玉の青葉光 三屋英俊

砂山に遠き波音小判草 榎本文代

曇天の路地の明るさ白すみれ 名和政代

大道芸猿は涼しき顔のまま 鹿毛満子

草笛や少年の日の音のまま 三屋英俊

絡みたる谷中寺町鉄線花 安藤美酒々

⑥ むちむちの幼のうでや夏つばめ 桔梗 純

⑦ むちむちの幼のうでや夏つばめ 桔梗 純

よく肥えた幼児の腕と夏つばめの取合せの句。「むちむち」という擬態語が効果を上げています。夏つばめは二番子を

子育て中か、餌を運ぶのにせわしく飛び回っている。生命力

に溢れた、明るく力強い句。元気を頂いた

曇天の路地の明るさ白すみれ 名和政代

曇天の路地の景を詠んだ。薄暗いそこに作者が発見した白

すみれ、その純白が路地を明るくしている。感覚の冴えた佳句。

絡みたる谷中寺町鉄線花 安藤美酒々

何よりリズムミカルな句。上五の「絡みたる」で半拍切れ、

中七下五へと一氣に読み下すことになる。意味上では「谷中

寺町の鉄線花」なのだろうが、心地良い音律に乗って、意味

はその次になってしまふ。作者の培って来たリズム感のなせ

る技なのだろう。

榎本文代選

原爆の曝書一面川の風 桔梗 純

次の足どこに置こうか田植の子 吉中愛子

捨て舟の富士壺ぬらす青葉潮 久留島規子

闇の奥より鶴篝の近づけり 江見悦子

緑蔭に電子煙草を吸ふ男 久留島規子

揺り椅子にゆれてスコッチ新樹の夜 三屋英俊

菌切れよき口三味線や夏の寄席 名和政代

万緑を逆さに止むる逆上がり 長谷川信也

気ままなる風に乗りけりしやばん玉 塗木翠雲

⑥ 鈍行の硬き背もたれ麦の秋 大久保 進

⑦ 鈍行の硬き背もたれ麦の秋 大久保 進

⑧ 鈍行の硬き背もたれ麦の秋 大久保 進

「背もたれ」から列車の響きが伝わってくるよう、なつか

しくやさしさを持った句。車窓にはのどかな景色が広がる口

ーカル線の旅。「麦の秋」のひなびた語感が追憶を誘うようでもある。

闇の奥より鵜簀の近づけり 江見悦子

鵜飼は飼いならした鵜を使って鮎を獲ることで、岐阜県の長良川が有名である。夜の鵜飼では、鵜舟の舳に篝火が焚かれる。「闇の奥」は闇の深さ。暗闇の中をゆつくりと進んでくる舟の篝火は幻想的である。

次の足どこに置こうか田植の子 吉中愛子

小学校の実習だろうか。田植は田の中に足を入れるとなかなか抜けない重労働。「どこに置こうか」からは思案しながらも頑張っている子どもの笑顔が見えてきそうである。

三屋 英俊 選

次の足どこに置こうか田植の子 吉中愛子

闇の奥より鵜簀の近づけり 江見悦子

鈍行の硬き背もたれ麦の秋 大久保進

砂山に遠き波音小判草 榎本文代

草笛の拙も良きかな別れ歌 長谷川信也

ゆるゆると遮断機あがり夏燕 榎本文代

日日の今日の好日豆ごはん 大久保進

どくだみの白の怪しき日暮かな 鹿毛満子

嘴痕の鵜鮎せいろに重ねられ 江見悦子

⑨ ポピー咲く深紅の丘をゆらす風 南雲秀子

⑩ ポピー咲く深紅の丘をゆらす風 南雲秀子

丘一面に広がる深紅のポピー。空は紺碧。そこを吹き抜ける心地よい風。丘全体の真つ赤なポピーが波打つように揺れている。その様を風が丘をゆらしていると。可憐なポピーと、丘を揺らす風のダイナミックス感の対比がいい。

鈍行の硬き背もたれ麦の秋 大久保進

ローカル線の「鈍行」の旅か。「硬き背もたれ」と、のんびりとした時間感覚に、どこか昭和的な雰囲気漂う。「麦の秋」がいい。窓外の黄金色に実った麦畑の景色を併せたことで、旅情と季節の空気が伝わってくる。

砂山に遠き波音小判草 榎本文代

作者が榎本文代さんとわかると「砂山」は新潟の寄居浜か。童謡「砂山」の、北原白秋の作詞の舞台は此処。遠くから聞こえてくる日本海の波の音。さらさらと風に揺れる小判草。写実的で诗情豊かな句。メロディーに乗った白秋の詩が聞こえてくる。

今後の新中央句会の予定

▽8月30日(日) 大妻女子大学 G棟 411室 13時より

▽9月27日(日) 大妻女子大学 G棟 411室 13時より

絵日記に収まりきらぬ夏祭

小学校の頃の夏休みの宿題に「絵日記」があった。絵日記帖のページの上半分に絵、下半分に文章を書くようになっていた。いくら夏休みといっても、そう毎日毎日ページを埋めるような特別な出来事があるわけではなかったから、この宿題は苦手だった。

そんな夏休みのある日、熊野神社の夏祭があるので一緒にいかないかと友達に誘われた。緑日には出かけたことがあったが、本格的な祭りはこのときが初めてだったので、おっかなびつくり出かけることにした。

境内に着き、言われるままに山車を曳くことになった。長い紐に掴まってぞろぞろと歩く。休憩所では、アイスキャンディーやらが振舞われてご機嫌だった。そうこうするうち、子ども神輿を担がないかと誘われた。「ワッショイ、ワッショイ」と大声を出しながらのお神輿に、テンションが上がった。休憩のたびに菓子や飲み物にありついた。

この一日はよほど楽しかったのだろう。俳句をやるようになって、この時の古い絵日記を偶然みつけた。他のページの絵はちゃんまりとしたものばかりなのに、この日のものだけはページをはみ出して、その日のあれこれが描かれていた。そのことを思い出しながら、こんな一句が出来たのであると。

後年、勤務先の国語の先生から、生徒たちが伊藤園主催の俳句コンクールに応募するので、一緒に出してみないかと言われて掲句を出してみた。特別佳作賞なるものをいただき、随分とたくさんのおうい、お茶」が届けられた。

* ページ調整のための埋め草として、不定期に掲載します。

特集

「好き」を俳句に

趣味と俳句

浅川芳直／折勝家鴨
加藤右馬／岸田祐子
小林貴子／近 恵
阪西敦子／佐藤文香
仙田洋子／辻村麻乃
成田 一子

■今月の巻

楠本奇蹄／吉原文音

■巻頭三句

久保純夫／藺草慶子

岩田由美／井越芳子

中川雅雪／河原地英武

鈴木牛後＋川本千栄

■俳句と短歌の10作発表

「麒麟」吟行記

遠藤史都

■今月のハイライト

「耕」「対岸」「青嶺」

「杏長崎」「風のサロン」

■好評連載

伊野孝行

人はなぜ風景を描くのか

吉川千早

俳壇ランドスケープ

青木亮人

句の手触り、俳人の書き

大西 朋

俳句へのまなざし

橋本喜夫

俳句のトリック

藤村公洋

俳句のつまみ

神作研一

てのひらの江戸

——古典箱を旅する

秘矢まりえ

諸家凸栗

石井隆司

なもとぼる

俳句よもやま話

俳句四季

Haiku Shiki

2026年8月号

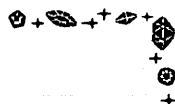
7月17日発売
定価1300円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市市栄町2-22-28 ☎042-399-2180



ルビーの小函 (8月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- | | |
|--------------------|-------------------------|
| 7 碑 (いしじ) | 25 猪口 (ちょこ) |
| 羞ひつ (はじらひつ) | 旨酒 (うまざけ) |
| 漣痕 (れんこん) | 緋ける (ひもとける) |
| 嬰珞 (ようらく) | 紫荊 (はなずおう) |
| 謂れ (いわれ) | 醬 (ひしお) |
| 8 輕兔の子 (かるのこ) | 26 荒磯 (ありそ) |
| 腐草螢となる (ふそうほたるとなる) | 蹲 (つくばい) |
| 9 茅花流し (つばなながし) | 27 余部 (あまるべ) *兵庫県の地名 |
| 11 項 (うなじ) | 28 紙魚 (しみ) |
| 昨夜 (よべ) | 29 根刮ぎ (ねこそぎ) |
| 13 東雲 (しののめ) | 棟の花 (おうちのはな) |
| 卯の花腐し (うのはなくたし) | 頻り (しきり) |
| 14 鶴 (こう) | 古潭 (こたん) |
| 裾廻 (すそみ) | 30 磯馴松 (そなれまつ) |
| 15 鳥交る (とりさかる) | 33 柵 (うだつ) |
| 16 茎立 (くくたち) | 36 天牛 (かみきり) |
| 魚籠 (びく) | 今生 (こんじょう) |
| 海月 (くらげ) | 河骨 (こうほね) |
| 17 秀 (ほ) | 凌霄花 (のうぜん) |
| 青条揚羽 (あおすじあげは) | 44 飛礫 (つぶて) |
| 梧桐 (あおぎり) | 落羽松 (らくうしょう) |
| 18 結葉 (むすびば) | 啞せる (むせる) |
| 鱗 (ひび) | 45 宥むる (なだむる) |
| 冠毛 (かんもう) | 46 籬 (たが) |
| 19 仙人掌の花 (さぼてんのはな) | 47 播る (する) |
| 20 抽斗 (ひきだし) | 49 郁子の花 (むべのはな) |
| 羅 (うすもの) | 昼紙 (たとう) |
| 21 著我の花 (しやがのはな) | 51 薩埵峠 (さったとうげ) *静岡県の地名 |
| 23 妣 (はは) *亡母 | 可惜夜 (あたらよ) |
| 出汁 (だし) | 母衣 (ほろ) |
| 山祇 (やまつみ) | 双手 (もろて) |
| 24 九十路 (ここのそじ) | 弛まず (たゆまず) |
| 24 蘭鉢 (らんちゅう) | 微睡める (まどろめる) |
| 25 雪形 (ゆきがた) | 弥撒 (ミサ) |
| 満天星の花 (どうだんのはな) | |

北 南 西 東

消 息 等

江見悦子主宰・小林愛子名誉顧問の句

「初蝶」開刊号に

父の丈はるかに超えて御慶かな 悦子

「くじら」6月号に

水底に花びらの影落ちゆけり 悦子

浮雲のをちこち地虫穴を出づ 愛子

「しろはえ」第37号に

調音の響く講堂卒業期 悦子

浮雲のをちこち地虫穴を出づ 愛子

「たかなな」6月号に

潮風の夜つびて荒ぶ年の果 悦子

第四回俳人協会神奈川支部総会・俳句大会

5月29日、逗子市逗子文化プラザホール

にて開催。柳澤宗正顧問が参加されました。

その際のレポートです。

総会の後、小島健氏（俳人協会副会長・

「河」同人会長）の「俳句再発見！」と題

する有意義な講演があり、参考になりました。

当日の「万象」からの出席者は小生一

人と思われませんが、事前投句、当日句の入

選の結果は次の通りです。

・事前投句

神谷彰夫 選

良きことは小さきことや葛湯吹く 田中道江

桑本堂生 選

天窓に春日さす蔵酢のにはひ久保田富士

國井みどり 選

子に譲る踏み割る一步薄氷 大久保進

・当日句

和田順子 選

稚魚群るる田越川の浅瀬夏日燦 柳澤宗正

首里城正殿復元記念

「沖縄美ら海俳句全国大会」

各支部にはパンフレットを送りました。

奮ってご応募下さい。

事前投句

選者 稲畑廣太郎 江見悦子

小川晴子 岸本尚毅

高野ムツオ 山田真砂年

応募期間 5月1日～8月10日

当句料 2句1組 千円

実行委員長 沖縄支部 中本清さん

実行委員 沖縄支部 前田貴美子さん

大会開催日 11月28日

会場 沖縄県立博物館美術館

博物館講座室

第31回「草枕」国際俳句大会

応募期間 7月1日～8月31日

投句料 2句1組 千円

詳細はHPを参照して下さい。

<http://kusamakura-hakuoutlook.jp>

毎日新聞「季語刻々」（6月9日）より

あざあや逢はずしくもの言はむ 細見綾子

「逢はずしくもの言はむ」がいいな

あ。ボクなどもたまにだが、涼やかに明確

に物を言いたい、とおもうことがある。た

いていはその逆で、早口になったり、ほそ

ばそつばやいたりする。アジサイのころは

蒸し暑い時期、それだけに涼しく物が言え

たらうれしい。この作者は1907年に現

在の兵庫県丹波市に生まれ、生家は一般公

開されている。（坪内稔典）

「鶴」6月号より

「ホームにひとり夏燕」という俳文の中

に、榎満喜子氏の「私の町の夏燕」という

短文があり、細見綾子の句が紹介されてい

ました。

「（前略）兄の代に農地を増やしたらしい。

古い家を取り壊し、新しい家を建てた。納

屋の戸もシャッターになり、燕が出入りで

きる所はない。前庭もコンクリートで固め

られ燕の好きな泥や枯草もない」。

つはめつばめ泥が好きなる燕かな 細見綾子

（報・編集部）

(←この線より切り取ってください)

令和八年

万象作品

十二月号

(九月十五日締切)

(句の表記は歴史的かなづかいで) (*の枠内には何も書かないでください)

都または市・町・村名	
姓	号
がなり	
年齢	

064-0808

札幌市中央区

南八条西15-1-5-904

万象作品投句係行

110円切手を
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

編集後記

▽既に本誌でも「大切なお知らせ」として紹介していますので、屋上屋を重ねることになりますが、同人作品の送付先が10月締切り分より変更になりましたことをお伝えします。これまで長期に亘りお世話頂いた榎本文代さん（神奈川）に感謝申し上げる次第です。

また、6月号からの「オンライン同人句会」のお世話と、本誌に掲載される高句の報告記事の執筆を、北浦詩子さん（北海道）がお引き受けくださいました。（千久）

▽創刊25周年記念の全国俳句大会の準備が進んでいます。出席の申込は、8月20日、作品集の投句締切は、14日です。よろしくお願いいたします。令和9年版俳句カレンダーの御案内も掲載しています。早めにお申し込みください。（規子）

▽浅草寺は1400年近い歴史を持つ都内最古のお寺です。雷門の正式名称は「風神雷神門」といい、風神様と

雷神様が門の左右に安置されています。雷門をくぐり、人通りの賑やかな仲見世をぬけ、朱塗りの宝蔵門をくぐり本堂へ。ここでは、畳敷きの内陣に入ることが出来ます。帰りは神谷バーで電気ブランを頂くのもいいですね。

（久美子）

▽最近、菌ちゃん農法を研究しています。これは長崎の吉田俊道先生の提唱されている農法です。倒木した木や竹の中に住む糸状菌に野菜を作ってもらうといった農法です。菌を集めると南方熊楠になった気になります。

（宣夫）

▽梅雨晴間に義姉が施設に入居。齡90。直前までケアマネさんと口論していたが、当日は観念したのか穏やかだった。その後になんて感想を聞くと、頭のしっかりしているうちに、自分で入居を決めたかったと。これは私への警鐘として聞いた。持つて行った助六寿司をおいしそうに食べる様子を見てひとまず安心して帰宅。（みや子）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万 象 俳 句 会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 八月号

第二十五巻 第五号

通巻 第二九三号

令和八年八月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一 三二一六 603

万象 発行所

☎三六三二四一五七九六

「万象」創刊25周年記念

令和8年度

「万象」全国俳句大会 「万象」同人会総会

案内

開催日

令和8年10月29日(木)

午前11時(午前10時30分より受付開始) ～ 午後4時終了予定

会場

ホテルグランドヒル市ヶ谷(東京都新宿区市谷本村町4-11) ☎03-32268101 17

【交通】JR中央線・総武線 都営地下鉄新宿線、東京メトロ有楽町線「市ヶ谷駅」より徒歩3分

同人会総会

活動報告・他

全国俳句大会

◆表彰 万象俳句賞

◆披露 令和8年度新同人・大会入選作品(特選句には選者染筆贈呈)

◆講演 坪内稔典氏

一万三千元(昼食代を含む)

申込み費

8月20日(木)までに会費を左記へお振込み願います。会費納入をもって参加申込みとします。

・ゆうちょ銀行より振込 ゆうちょ銀行(記号)11300 (番号)22149281(通常貯金)

・他の金融機関より振込 ゆうちょ銀行(店名)138 (口座番号)2214928 (普通預金)

口座名義 コイケキヨハル ☎03-3681-5900

※当日・前日の当ホテルでの宿泊の斡旋はいたしませんので、各自ご手配ください。

※有志吟行会は実施いたしません。大会終了後、別室にて懇親会(希望者による二次会を予定しています)。

大会作品募集

作品

一人4句まで(1-3句でも投句可)

「万象」誌(7月号)巻末綴じ込みの投句用紙をご使用ください。(110円切手を貼ってください)

無料 *締切 8月14日(金)

〒165-0022 東京都中野区江古田4-12-11 一由久美子 ☎090-4746-1863 2

令和8年度「万象」全国俳句大会実行委員会

大会委員長 江見悦子

実行委員長 中村千久

実行委員長 中條睦子

令和8年度「万象」同人会総会